大瀬戸町文化財調査報告書 第Ⅰ集

大瀬戸町石鍋製作所遺跡

詳細分布調査報告書

1980

長崎県大瀬戸町教育委員会

ホゲット石鏃製作所遺跡　第６製作跡北東開口部景観

ご あ い さ つ

このたび、昭和54年度事業として実施した大瀬戸町内に所在する石鍋製作所遺跡群の詳細分布調査の実施報告書を刊行することになり、関係者の方々とともに心から喜びに堪えません。

石鍋とその素材である滑石は、私たち大瀬戸町民にとって大変なじみ深いものであります。古くから私たちが「温石（おんじゃく）」という名で親しんできたこの滑石は、薬剤や肥料の材料として工業用に採掘されてきたばかりでなく、その名のとおり保温力に富む性質を利用して湯タンポがわりに用いたり、石筆として使ったりして日常生活にも深いつながりがあったからであります。

このたびの調査に際してお聞きすることによれば、滑石は、遠く縄文時代の大古から土器の土に混ぜたり、漁業の錘などとして利用されていた由でありますし、石鍋にいたっては、広く近畿以西、沖縄の地にまで流布しているとのことでありますが、日本の西端にあって最近まで「陸の孤島」という名称まで冠せられていた当町一帯が、実は数千年の昔から、広く人と物の往来があり、日本の歴史と深くかかわっていた、という事実を知り感慨深いものがあります。

私たち大瀬戸町民にとって、滑石や石鍋は、日常きわめてなじみ深いものでありながら、それがどのような意味と歴史を持つものか、つい、うっかりとおきざりにしがちなことをあらためて反省しつつ、今の時代に生きる人間として、尊い郷土の先人の足跡を尋ねて認識を新たにすることの必要性を、今更ながら痛感するものであります。

終りになりましたが、報告書の発刊にあたって、調査の立案から執筆まで、種々御労苦を賜りました諸先生に深甚なる感謝の意を申しあげます。

昭和55年３月31日

大瀬戸町長　長　田　福　市

発刊にあたって

わが大瀬戸町は長崎市から北西にのびる西彼杵半島の中央部に位置し、五島列島と五島灘をへだてて相対しております。概して古代の遺跡と称するものに乏しく、強いて申しあげれば享保年間にこの地方の農民が猪害防止のために築いたといわれる猪垣と、今回調査していただいた石鍋ぐらいのものしか話題にならない状況でした。

この石鍋についても、当町を中心として、あちこちの山中に散在してあることは古くから知られておりながらも、平家の落人が作って使用したものだろう程度のことで、それが調査の概要が発表され、多くの脚光をあびて逆にこちらの方がびっくりしたというのが正直な気持だったと思います。

しかし、これからはこの貴重な遺跡に対し先ずもっと認識を改め、未だ不明な点も多い石鍋の今後の調査研究のため全力投入の姿勢で望み、更に遺跡の保全保護対策等にも行政と力をあわせて万全を期してゆきたいと存じます。

調査研究の内容については御専門の長崎県文化課の正林先生、県美術博物館の下川先生に御願い致しておりますが、今回の調査実施にあたり物心両面から何かと御援助いただいた文化庁、長崎県をはじめ、直接現地での御指導を賜わりました稲田技官をはじめ、考古学、地質学の諸先生方に衷心より感謝申しあげるとともに、現地で種々協力していただいた岸川さん、森山区長さん等地元の方に厚くお礼を申しあげて、調査報告書発刊の言葉といたします。

昭和55年３月31日

大瀬戸町教育長　坂　井　正　美

凡　　例

1．本書は、長崎県西彼杵郡大瀬戸町内所在の石鍋製作所遺跡群に関する詳細分布調査の報告書である。

2．調査は、昭和54年6月4日から10日間、大瀬戸町が事業主体となり国庫および県費の補助をうけて実施した。

3．本書は、本町内所在の滑石製石鍋製作所群について、分布状況の概要と、特に内容等にすぐれたホゲット遺跡について行った詳細記録を中心として報じるものである。

4．各遺跡の名称については、○○石鍋製作所遺跡と標示しているが文中においては、○○遺跡と表現している。また、各遺跡において、複数の製作所をもつものについては、No.を付し、第○製作跡と標示した。

5．調査は、大瀬戸町教育委員会のもとに、正林　護（県文化課指導主事）、下川達彌（県立美術博物館学芸員）が担当した。

7．現場における写真撮影は正林が行い、吉福清和氏（県立長崎西高校教諭）に助力願った。遺物撮影は正林による。

8．挿図、実測図等は下川の原図による。

9．ホゲット遺跡の名遺構群の配置状況等の測量は、大瀬戸町建築課深草栄喜による。

10．調査の実施については、文化庁関係官稲田孝司氏の他、調査顧問の指導を得た。また調査に当って、多くの方々の教示と協力があったが、「経過」の項に列記した。

11．石鍋出土地名一覧は府県及び研究機関並びに研究者に依頼したアンケートを含めて下川が作成し、中田敦之が協力した。なお「滑石製石鍋考」（下川1974）を基礎資料とした。

12．本書の編集は、正林が担当した。

本 文 目 次

調査の動機と経過……1
大瀬戸町の位置と地形……4
西彼杵半島の滑石……8
詳細分布調査の概要……12
大瀬戸町内石鍋製作所遺跡……15
①大屋岩(おおやいわ)石鍋製作所遺跡……19
②ドンク岩石鍋製作所遺跡……19
③万助山石鍋製作所遺跡……19
④飯盛山石鍋製作所遺跡……22
⑤駄馬石鍋製作所遺跡……24
⑥目一ツボ第1石鍋製作所遺跡……25
⑦目一ツボ第2石鍋製作所遺跡……26
⑧ホゲット石鍋製作所遺跡……28
ホゲット石鍋製作所遺跡……29
滑石の利用……71
石鍋出土地名等の集録……73
石鍋製作所一覧……74
石鍋出土地名一覧……75

挿 図 目 次

第1図　長崎県大瀬戸町位置図……5

〃2〃　長崎県西彼杵半島地質図……8

〃3〃　神浦消石鉱床にみられる累帯配列……9

〃4〃　ホゲット遺跡および雪浦ダム付近地質断面図（東西方向）……10

〃5〃　大瀬戸町所在石鍋製作所遺跡分布図……11

〃6〃　ホゲット石鍋製作所遺跡の製作跡遺構配置図……31

〃7〃　層位模式図……47

〃8〃　粗型剝ぎとり過程図……52

〃9〃　ホゲット第6製作跡北西壁および断面図……69

図 版 目 次

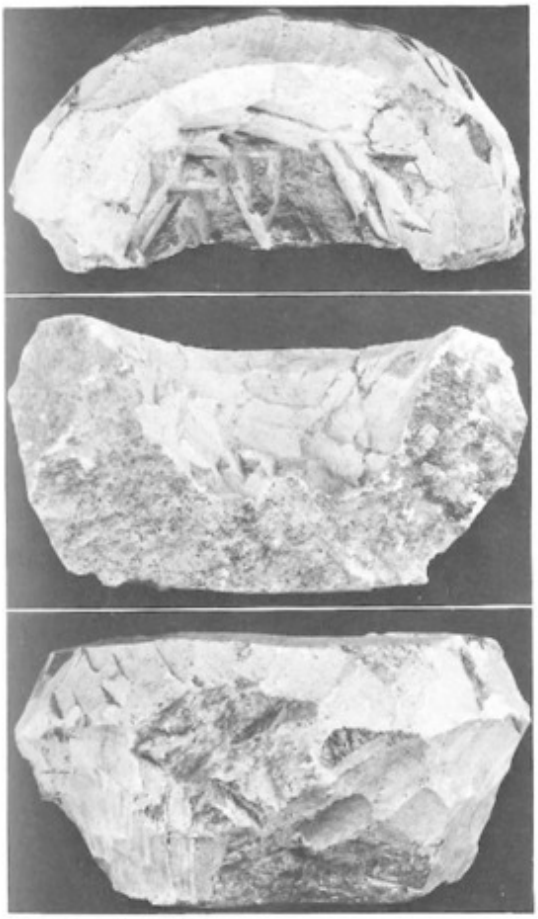
図版 1　粗型石鍋……1
〃 2　大瀬戸町の地形（雪浦川河口と砂丘上の集落）……6
〃 3　大瀬戸町の地形（雪浦川と西彼杵半島背稜山地）……7
〃 4　万助山石鍋製作所遺跡……20
〃 5　万助山石鍋製作所の岩壁……21
〃 6　飯盛山石鍋製作所遺跡群……22
〃 7　飯盛山石鍋製作所の坑道入口……23
〃 8　作り出された粗型石鍋群（飯盛山）……23
〃 9　駄馬石鍋製作所遺跡……24
〃 10　駄馬石鍋製作所遺跡における方眼割付けと石鍋製作状況……25
〃 11　目一ツボ第1石鍋製作所遺跡のある山塊頂上……26
〃 12　目一ツボ第2石鍋製作所遺跡……27
〃 13　ホゲット石鍋製作所遺跡第6製作跡……28
〃 14　ホゲットの山塊と雪浦川……29
〃 15　ホゲットの山頂の蛇文岩露頭と西彼杵の連山……30
〃 16　「仙人の足形」が刻まれた蛇紋岩露頭……32
〃 17　「仙人の足形」……33
〃 18　ホゲット第1製作跡……35
〃 19　ホゲット第2製作跡の岩壁と掘り凹みとズリの堆積……36
〃 20　ホゲット第2製作跡における方眼割り付けの状況……36
〃 21　ホゲット第2製作跡における方眼割付けの状況(転石)……37
〃 22　ホゲット第3製作跡……37
〃 23　ホゲット第4製作跡……38
〃 24　ホゲット第4製作跡の石鍋製作状況……39
〃 25　ホゲット第5製作跡……39
〃 26　ホゲット第7製作跡……40
〃 27　ホゲット第8製作跡……41
〃 28　ホゲット第8製作跡における滑石と蛇紋岩の互層状態……42
〃 29　ホゲット第9製作跡……43
〃 30　ホゲット第10製作全景……43
〃 31　ホゲット第10製作跡の石鍋製作状況……44
〃 32　ホゲット第10製作跡における石鍋のはぎとりあと……44

図版33　ホゲット第11製作跡……45
〃 34　ホゲット第11製作跡における石鍋製作と壁面調整状況……46
〃 35　ホゲット第11製作跡における足場用の穿孔……46
〃 36　ホゲット第6製作跡における試掘壙と層位……48
〃 37　ホゲット第6製作跡試掘壙第2層におけるたき火跡と石鍋出土状況……49
〃 38　ホゲット第6製作跡の北西壁……50
〃 39　ホゲット第6製作跡の南東壁……51
〃 40　ホゲット第6製作跡の調整ノミ痕……51
〃 41　ホゲット第6製作跡北西壁最上部における石鍋製作状況……53
〃 42　方形部を残した粗型石鍋……54
〃 43　ソロバン玉型の粗型石鍋……55
〃 44　鍔を作りだした粗型石鍋……56
〃 45　粗型石鍋……57
〃 46　粗型の上面にうたれたノミ痕……58
〃 47　内部加工に失敗した粗型石鍋……59
〃 48　内部加工の状況……60
〃 49　内部加工の状況……61
〃 50　経筒（蓋？）……62
〃 51　スタンプ型製品……63
〃 52　小型の滑石製容器成品と粗型……63
〃 53　石鍋の鍔各種……64
〃 54　石鍋の鍔各種……64
〃 55　短冊状滑石製品……65
〃 56　異型滑石製品……66
〃 57　筒型滑石製品……66
〃 58　時計まわりの内部加工のある破損品……67
〃 59　鈴なりの石鍋製作岩盤（第6製作跡北西岩壁上半部）……68
〃 60　調査風景ホゲット第11製作跡……68

調査の動機と経過

長崎県の中央部にある西彼杵(にしそのぎ)半島は東側に大村湾、西方に五島灘をのぞむ南北約30kmの細長い半島である。半島の北半、西海・西彼・大瀬戸の各町の山林中に図版1のような滑石製石鍋の未製品がしばしば発見されることは古くから知られていた。個々の未製品だけでなく、滑石の露頭が各所にあり、半球型の粗型石鍋が岩壁にはりついた状態で見られることも知られ、文献にも古い報告例があるが、製作所遺跡がけわしい山中にあることによるものであろうが組織的な調査や論考もたえて久しいものがあった。

石鍋の出土する遺跡は西日本一帯に見られているが、悉く成品として出土しており、西彼杵半島北部山中で見られるものは粗削り段階のものに限られるといっても過言ではないであろう。したがって、正しくは「粗型石鍋製作所」とでも称するのが実態を伝えているといえよう。いずれにしても、遺跡のある現地で加工と搬出が行われ、完形工程は場所を移していることは疑問の余地がない。完形工程の場所については現時点では皆目不明であるが、搬出の経路や機構の問題にとりくむことは、中世資料の乏しい当地方の実態に迫る有力な手段となり得ると考えられる。その第一段階として、滑石製石鍋製作所の分布や遺跡遺構の概要を把握することの必要が指摘されていた。



図版1　粗型石鍋

一方、かつては「陸の孤島」という呼び名さえあった西彼杵半島にも開発の手は確実にのびつつあるという情勢の中で、遺跡の実態把握と保護の方途を考える必要が指摘されていた。

本来であれば、前述三箇町全体を調査の対象とすべきであることも考えられたが、石鍋製作所遺跡が険阻な山中にあり、石鍋の搬出や人工の入山に河川が利用されたらしい、という予察もあり、雪ノ浦川・神ノ浦川等、有力河川があり、かつ滑石岩塊の露頭のより多いことが、大瀬戸町に焦点がしぼられた理由である。以上が、大瀬戸町内の石鍋製作所遺跡に関する詳細分布調査が実施された動機であり理由である。

昭和52年度、生産関係遺跡のリストアップ調査が文化庁によって行われ、本県においては石鍋製作所が筆頭に挙げられ、昭和53年度の生産関係重要遺跡の資料整備が行われた。それにもとづき、昭和53年5月、文化庁記念物課稲田孝司氏の現地踏査が実現し、調査と顕彰策検討の必要性が強調された。大瀬戸町においては、教育委員会を中心に詳細分布調査の実施について検討が開始されることとなった。調査は昭和54年度国庫および県費補助によって実施されることになった。大瀬戸町のみならず西彼杵半島の山中は鉱業諸権の設定されている場所が多く、現地踏査以上の調査に関しては調整を要するが、大瀬戸町当局において、詳細な照会作業が行われた。調査は、昭和54年6月4日～13日間実施された。調査の内容は、町内の古老・森林関係者・郷土史家に対する滑石露頭個所・地名・伝承・口碑等についての事情聴取を実施、それにもとづく現地踏査を実施した。今回調査目的の一つに、史跡指定候補遺跡の選定とその記録措置があるが、羽出川郷所在のホゲット遺跡が規模・内容・保存の状態等の諸条件に最もよく合致することが判明し、史跡指定申請候補遺跡として地形実測・遺構実測・遺構群配置図・写真撮影等の記録措置を実施した。

期間中、文化庁記念物課稲田孝司氏の現地指導があり、九州産業大学教授森貞次郎氏ほか、考古学、地質学関係顧問の指導を得た。地元町の皆さんには、農事繁忙の時期にもかかわらず、連日の調査に協力をいただいた。また、大瀬戸町および同町教育委員会の方々は、調査の立案から、現地の調査活動にいたるまで終始御苦労ねがった。調査が終始スムーズに進んだのは、これら関係者の総力によるものである。記して謝意を表したい。

調査関係者（順不同　敬称略）

1．調査指導

稲田孝司　文化庁	森貞次郎　九州産業大学教授　考古学
横山浩一　九州大学教授　考古学	石丸太郎　長崎県文化財保護審議会委員
鎌田泰彦　長崎大学教授　地質学	

2．調査団

坂井正美　大瀬戸町教育長	内山日吉　大瀬戸町教育委員会事務局長
白浜義数　大瀬戸町教育委員会	一瀬勝吉　大瀬戸町教育委員会
林　俊範　同　上	吉田　浩　同　上
吉福清和　県立長崎西高等学校教諭	宮下　栄　県立平山養護学校教諭
正林　護　県文化課指導主事　調査担当	堀内　幹　長崎教育事務所
下川達彌　県立美術博物館学芸員　調査担当	

3．調査協力者

中島宏士・田川国雄・宮崎新一・上野俊昭・山口兼男・堀内哲三・田川節子・堀内富子・森山　了・隅田　正・岸川満一・岸川シノ・岸川キワ・隅田サチ・森山カヅエ・中村常夫・岸川一郎・中本周一・村上徳見・山下藤吉・内海チズ子

以上の方々の外に、調査期間中に次の方々から、多くの教示を得た、芳名を記して感謝の意を表する。

三島　　格　福岡市文化財専門委員
白木原和美　熊本大学教授
甲元　真之　熊本大学助教授

大瀬戸町の位置と地形

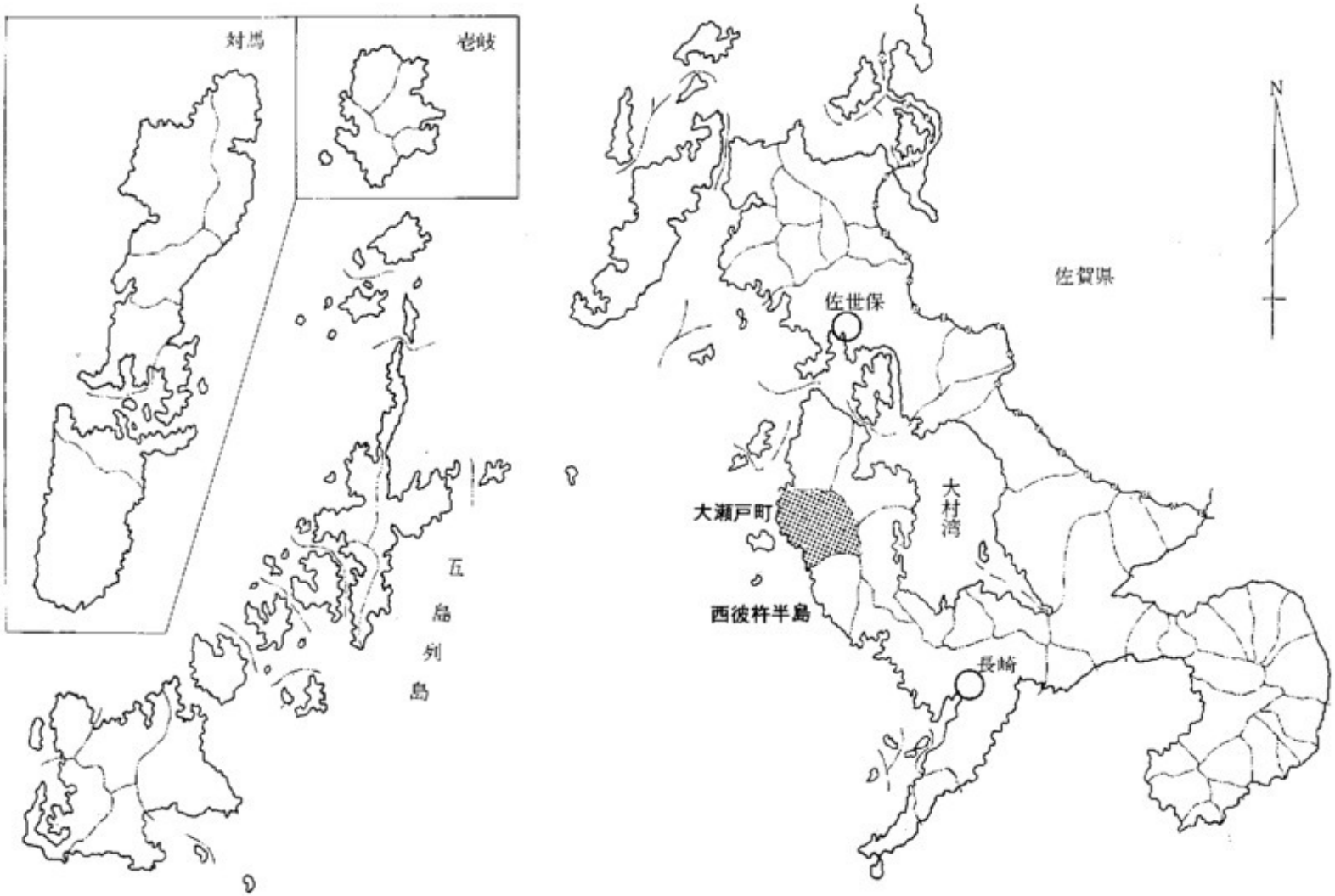
大瀬戸町は、長崎県のほぼ中央部にある西彼杵郡にあり、郡は長崎（野母）半島と西彼杵半島からなる。大瀬戸町が位置するのは西彼杵半島の北西部であり、西方は急崖をなして東シナ海に没するロッキーコーストと狭隘な砂嘴が交互に見られる海岸線をなしており、付属の小島や瀬が奇観を呈している。北隣は同郡西海町、東隣は西彼町および琴海町に接し、南辺は外海町と境を接している。

一方、西彼杵半島は長崎市の北辺にあって南から北方にのびる長さ約30kmの半島であり、東は大村湾をひかえ、北端は針尾瀬戸の急潮をはさんで針尾島を望んでいる。半島のほぼ中央を標高400～500mの山地が南北に走って分水嶺をなしており、河川は東西に分流する。西彼半島にある諸町は、この背稜山地をはさんで境界を接している。背稜山地は標高に比して山容険阻で照葉樹林がよく繁茂して水資源豊かである。海岸部は砂嘴の発達した部分に集落が営まれているが、砂嘴以外の海岸線は断崖状となって、集落間の交通を近年まで妨げてきており、特に半島西半の地区は「陸の孤島」なる異称で呼ばれてきた。

大瀬戸町も同様の地形条件下にあり、標高に比して険阻な山地が海に急没してロッキーコーストをなし、樫浦・雪ノ浦・東浜にわずかに集落を形成して砂嘴ないし砂丘上にのっている。半島の背稜山地から流出する河川は多く峡谷を作り、川幅は全体に狭小であるが水量豊かで、近年、雪ノ浦ダム等の築造が行われている。かかる地形にあって、町のほぼ中央部を雪ノ浦川が西南方向に走り、河口部には集落が発達している。町の南部には河通川が流れ、河口近くで雪ノ浦川に合流し、上流には河通ダムが作られている。雪ノ浦川の中流では、北から流れる羽出川が合流している。町の北方には多以良川が北流して狭長な水田地帯を潤している。このように大瀬戸町内を流れる河川は、大きく雪ノ浦川系と多以良川水系とに分れているが、雪ノ浦川は県内では有数の河川であり、上流域には雪ノ浦ダムが築造され、ダムの更に上流は藤原川となる。

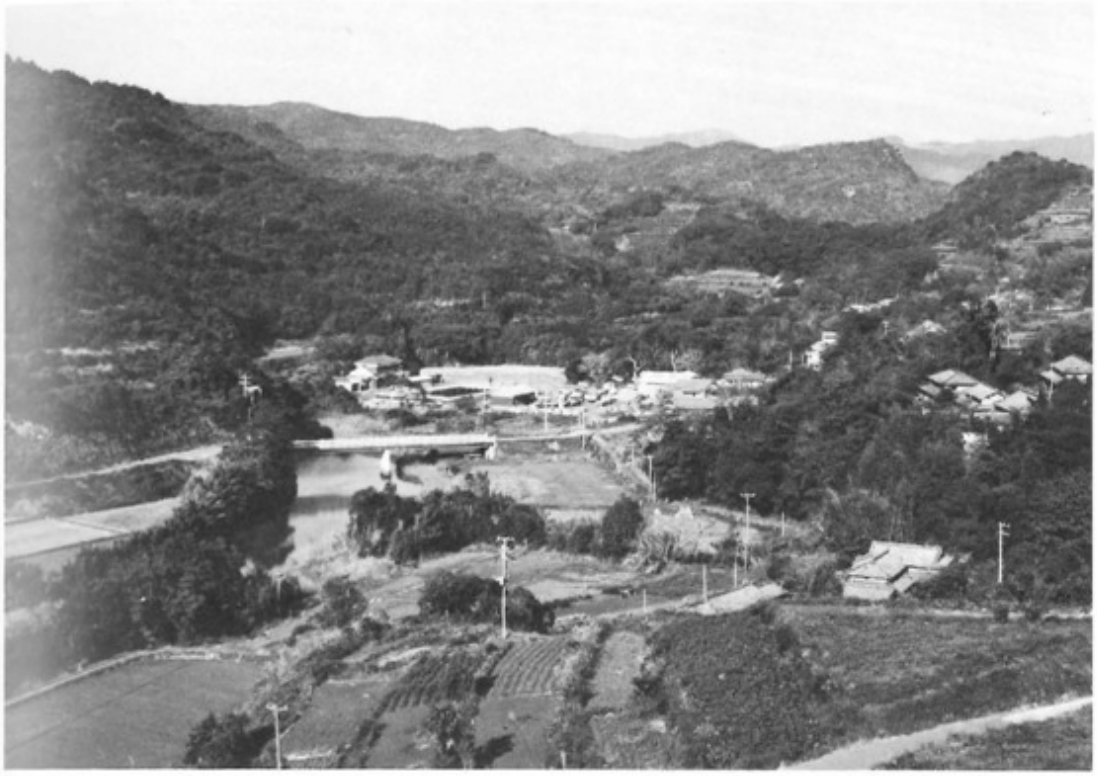
以上の地形条件下にあって、道路は近年まで未発達であり、古くは河川添いの道路しか見られず、特に背稜山脈をはさんでの「内海」地域との交流は困難をきわめていたようである。

石鍋製作所遺跡のある滑石層露頭は険阻な山地にあり、海岸や平地部での露頭は見られず、石工の往来は河川添いの利用を余儀なくされていたと考えられる。かかる条件は、縄文時代の太古以来のものであり、遺跡は悉く河口部に集中していることからも、河川添いの交通が首肯されよう。一方、石工の往来のみでなく、石鍋の搬出や出荷も、かかる地形条件下において行われたであろうから、河川自体を利用したことが容易に推察され得るであろう。滑石の露頭は、町内の山地のいたるところに見られるが、石鍋製作の行われた露頭は、悉く河川流域に近く認められることに留意される必要がある。河通川南岸の目一ツ坊



第1図　大瀬戸町位置図

図版 2　大瀬戸町の地形(雪浦川河口と砂丘上の集落)



図版3　大瀬戸町の地形（雪浦川と西彼杵半島背稜山地）

遺跡群や雪ノ浦・羽出川流域のホゲット遺跡・音無川流域の万助山遺跡等は好例である。また、石鍋製作所遺跡が、比較的入山と石鍋の搬出に便利な河川流域の滑石露頭地に営まれているところからすれば、飯盛山石鍋製作所遺跡は西彼半島背稜山地の分水嶺に近く成立しており、きわめて不便な条件下にある。かりに、人間の行動心理のうえから、便利な条件の場所をまず選択するであろう、ということを肯定すれば、遺跡群相互の中で、便利さを規準にした大まかな新旧関係は成立し得ないであろうか、ということが考えられる。同時に、かかる地形条件から考えて、「日帰り」の石鍋製作行動は困難なところから、石鍋工人の野営の可能性も考慮する必要があると考えられる。また、製作した粗型石鍋は相当の重量があり、険阻な山地からの搬出には集団的行動が必要であろうことも容易に推測されるところであり、石工集団を統制する機構の存在が、地形条件から推測される。

（正林）

西彼半島の滑石

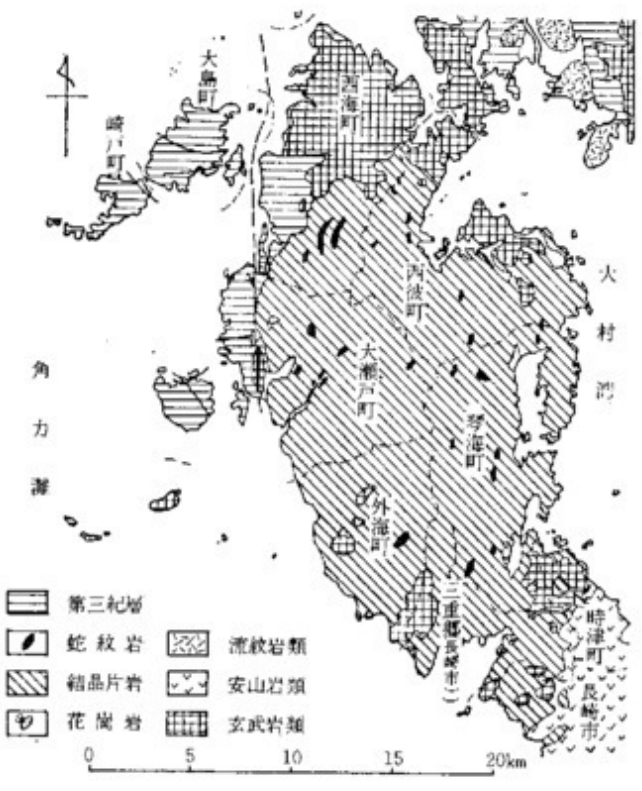
1．西彼杵半島の地質の概要

長崎市の北西部を付け根とし、大村湾の西側を南北に向って延びる西彼杵半島は、長崎市より南西に突出する野母半島と共に、長崎県において最も古期の岩石に属する「西彼杵変成岩類」(または「長崎変成岩類」)によって構成されている。これは、主として黒色片岩や緑色片岩といった結晶片岩類からなるが、諸所で蛇紋岩がこれらに貫入している。石鍋の素材となっている滑石は、後述する様に、この蛇紋岩の周縁部に発達する滑石鉱床より掘出されているものである（第2図)。

西彼杵半島に分布する結晶片岩の大部分は、石墨・白雲母・石英などを主成分とする黒色片岩であり、「雲母片岩」と呼ばれる場合が多い。黒色片岩は泥質の堆積岩起原の結晶片岩である。含有鉱物の平行配列によって生ずる片理構造が顕著に発達するため、地表近くで風化すると、たやすく剝離して、薄板状の岩片となる傾向をもつ。

野母半島において、黒色片岩と互層して広く分布する緑色片岩は、緑泥岩や緑簾石を主成分とし、火山岩や凝灰岩を起原とする結晶片岩である。西彼杵半島では、緑色片岩の発達に乏しく、黒色片岩中に断片的に小さな岩体が層状に挟在するにすぎない。

西彼杵半島の北西部には、結晶片岩の上に西彼杵層群と呼ばれる海成の第三紀層が重なり、貝類や石灰藻などの化石を豊富に含んでいる。とくに、西海町の七釜鍾乳洞は、その地層中の石灰藻石灰岩が発達する部分が、地下水による溶食により作られたもので、沖縄県の鍾乳洞を除いては、第三紀層中に形成された鍾乳洞として本邦唯



第2図　長崎県西彼杵半島地質図

--のものであろう。また、半島の北部や南部においては、溶岩流状の玄武岩が、結晶片岩や第三紀層を被覆して分布する。

2．蛇紋岩と滑石鉱床

西彼杵半島における蛇紋岩は、北部の西海・西彼町においては幅広い帯状のものが、また中・南部の西側の大瀬戸・外海町においては断片的な小さな岩体として分布する。全般的にいえることは、本地域の蛇紋岩の岩体の形態は、結晶片岩の片理に調和した凸レンズ状をなす。岩質は緻密であり、また塊状の岩体をもつため、まわりの結晶片岩と比べて浸食に対する抵抗が強く、地表では突出した露岩をつくる場合が多い。この地域の蛇紋岩は、蛇紋岩化作用が著しく進み、カンラン石や輝石などの残存斑晶は稀れであり、また蛇紋石の結晶片は他地域産のものより一般に粗であるといわれている。

蛇紋岩の岩体の周縁部に近づくと滑石の生成が認められ、更に外縁部においては蛇紋石が認められない程に滑石化が進んでくる。滑石の外には、陽起石・緑泥石・絹雲母・曹長石などが規則正しく帯状に発達し、ついには母岩の結晶片岩に移化する。こうした西彼杵半島の蛇紋岩の周縁部に発達する鉱物帯は、とくに「西彼杵型滑石鉱床」と呼ばれている。

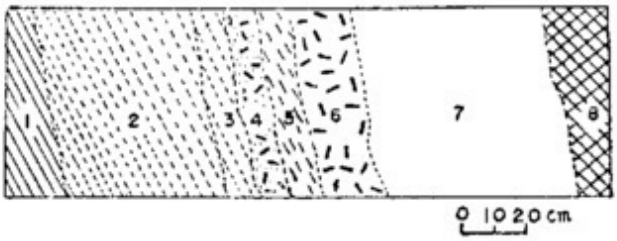
3．西彼杵型滑石鉱床における累帯配列

内田義信・牟田邦彦（1958）の研究によれば、西彼杵型滑石鉱床においては常に蛇紋岩と母岩をなす黒色片岩（絹雲母石墨石英片岩）との間には、次の様なほぼ一定の順序で変質鉱物の累帯配列が認められる（第3図）。

蛇紋岩→炭酸塩鉱物・蛇紋岩帯→滑石帯→陽起石帯→緑泥石帯→絹雲母帯→曹長石・絹雲母片岩帯→石墨・曹長石・石英・絹雲母片岩（黒色片岩）

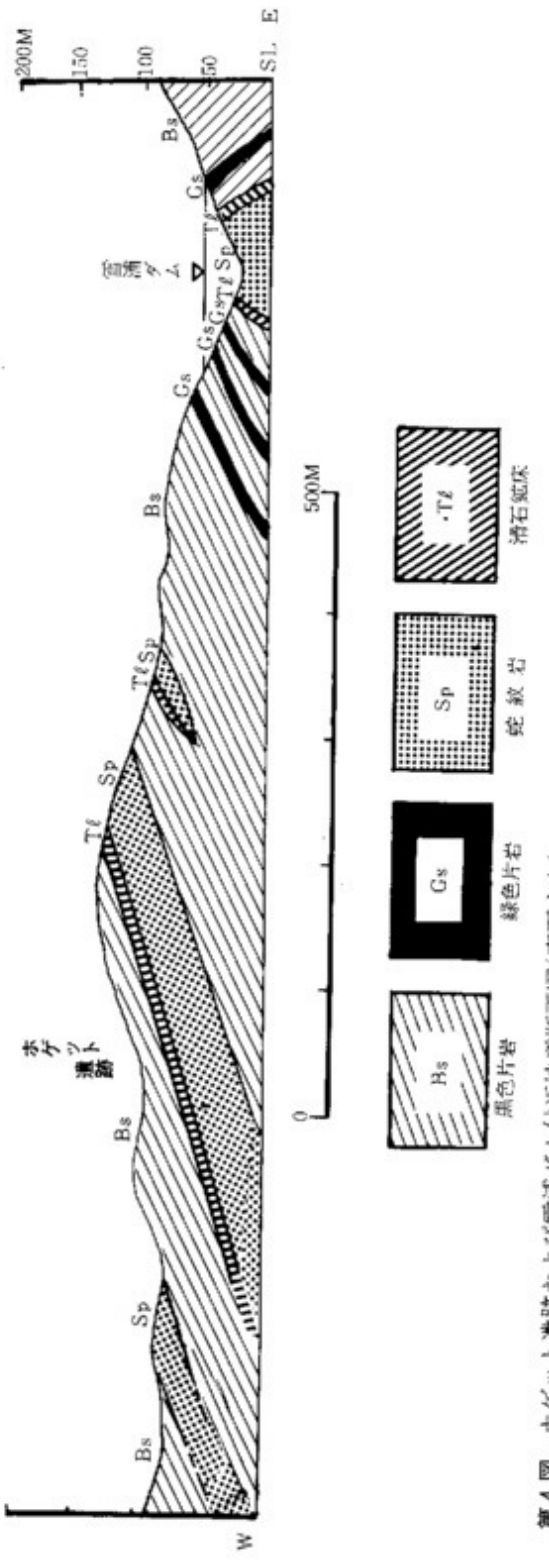
蛇紋岩体の周縁部に知られるこれらの変質鉱物帯の規模は、蛇紋岩の大きさに関係し、その10～100％の間の幅をもつ。また鉱物帯の約60％以上が滑石帯、約16％が陽起石帯で、緑泥石、絹雲母、曹長石の各帯はそれぞれ10％以下である。

西彼杵型滑石鉱床は、広域変成作用が行なわれた際、蛇紋岩が隣接する結晶片岩との間の物質移動による反応帯として形成されたものである。ここでは、蛇



1：絹雲母石英片岩，2：曹長片岩帯（1～50cm），3：曹長片岩帯（10cm），4：絹雲母・緑泥石（竜気石）帯（10cm），5：片状陽起石帯（10cm），6：粗晶陽起石帯（20cm），7：滑石帯（100cm），8：蛇紋岩（内田・牟田，1958による）

第3図　神浦滑石鉱床にみられる累帯配列



第4図 ホゲット遺跡および雪浦ダム付近地質断面図(東西方向)

紋岩($3MgO \cdot 2SiO_2 \cdot 2H_2O$)の成分に、結晶片岩より移動するSiが増加することにより滑石($3MgO \cdot 4SiO_2 \cdot H_2O$)の生成が行なわれたものと解される。

4. 大瀬戸町ホゲット遺跡付近の地質

西彼杵半島の蛇紋岩周縁部の滑石鉱床が露出する付近には、しばしば滑石石鍋の破損したものや未完成品が散在するのが常である。中でも、大瀬戸町瀬戸羽出川郷ホゲットでは大規模な石鍋製作所跡がある他、その近くには白樫鉱山の滑石採掘の旧鉱がある。

ホゲットと呼ばれる場所は、雪浦川右岸の標高およそ120m高地の北斜面にある。この高地の雪浦川に面する南斜面においては、山頂部付近には蛇紋岩が分布し、その露岩が断崖を造っている。中腹以下には黒色片岩が分布し、その片理面は北に向って20~30°傾斜するので、山腹斜面に対して受け盤をなす。雪浦川をはさんで対岸をなす左岸側では、黒色片岩の片理面は逆に南傾斜となる。この状態

は、ホゲットの沢の入口より約1km上流の雪浦ダム付近に典型的に認められ、雪浦川の流路を軸とする背斜構造が知られている（第4図）。ダムサイトでは、谷底の背斜軸付近に最下部の蛇紋岩があり、谷の両側には黒色片岩が広く分布し、2～3枚の薄い緑色片岩を挟在する。これらの結晶片岩は、右岸側では右（西）に、左岸側では左（東）に傾斜して背斜構造を呈する。

ホゲット付近の蛇紋岩は北傾斜の層状岩体で、その厚さはおよそ50mと推定される。蛇紋岩の上盤に厚い滑石鉱床が随伴し、北に面するゆるやかな山腹斜面に広く露出する。石鍋製作所跡群は、その滑石鉱床の露頭の上に散在している。白樫鉱山において採掘の対象となった滑石もこれと同じ鉱床である。採掘時に測定した記録によれば、滑石鉱床は厚さ1.5～2.5mの層をなし、その走向はN 20°E、傾斜は18～20°NWであった。

5．ホゲット遺跡の滑石

ホゲット遺跡における滑石の産出状態は、これまで述べてきた西彼杵滑石鉱床と同一の型式をとっている。本遺跡中で最も大規模な第6製作所跡では、N32°E～N36°E方向のクレバス（延長約60m）の壁面に滑石が露出しているが、底に堆積した廃石（ズリ）の中には多量の緑泥石や陽起石が混在している。

蛇紋岩に付着した状態の滑石層の厚みは、第4製作所が70cm、第5が100cm、第8が25cmと、必ずしも一定していない。また、滑石そのものは一般に塊状であるが、場所により片状を呈することもある。

ホゲットの滑石の色は薄茶色を呈し、白度は著しく低い。比重は2.78、吸水量は0.65%と測定された。長崎県内においてバラスとして採石されている岩石の平均比重が、輝石安山岩で2.65、玄武岩で2.82であるので、この滑石の比重は輝石安山岩よりやや重く、玄武岩よりやや軽い値をもっているといえよう。

（鎌田）

詳細分布調査の概要

本年度の調査は、個別遺跡についての発掘調査ではなく、①大瀬戸町内における石鍋製作所遺跡群の位置等を確認し、分布図を作成すること、②遺跡群の中で規模・内容・保存度等、特にすぐれた遺跡を選択して、遺構の配置と地形の実測・撮影等の記録措置を施すこと、③これらの実施記録を基礎資料として生産関係遺跡として、史跡指定申請の資料を得ること、同時に指定後の保存整備計画の立案の基礎資料とすることに目的が定められた。このための方途として、①地元の郷土史家、森林関係者、鉱業経験者からの諸情報を得るための聴取作業、②遺跡群の位置等を確認、記録化するための現地踏査、③最重要遺跡の詳細記録作業を計画、実施した。調査期間の関係から、②については、後日、踏査を補充した遺跡もあるが、大要、所定期間内に所期の目的を達し得たと考えている。

以下、その概要について述べる。

○聴取作業

林務従事経験者、区長、鉱業経験者、郷土史家、長崎県文化財保護指導委員（西彼杵地区担当）、大瀬戸町文化財保護審議会委員、同町議会文教委員、同町建設課職員、同町教育委員会職員、調査担当者が同席して、石鍋製作所遺跡所在地点、石鍋製作に関する口碑、伝承、関連地名等について情報の提供と交換を行った。得られた情報の中には、すでに知られている点もあったが、その点を含めて、大要次のとおりである。

1．石鍋製作所遺跡は、滑石の露頭の発見しやすい山頂部や、山塊の中腹域に多く成立しており、露天のものが多い。一部には坑道ないし、半坑道掘りのものもある。
2．滑石の露頭は、海岸部や平地部には見られず、山地帯にある。従って製作所遺跡も険阻な山地形の場所に多い。
3．製作所遺跡は、散漫な分布状態でなく、群をなして偏在している。偏在のし方は、雪ノ浦川・河通（ごうつう）川・藤原（ふじばる）川流域の山地にあって群を構成している。
4．このことは、石鍋工人が製作所への出入にあたって、最も往来に適した河川添いを利用し、かつ、生産した粗形石鍋を現場から搬出出荷するのに、河川を利用するのが最も有効であったと考えられること。たとえば、西彼杵半島最大の河川である雪ノ浦川と、その支流である羽出川の合流地点一帯には有力な製作所遺跡があり、またマブノクチなる地名が遺存して、石鍋工人の離合集散と石鍋の集・出荷が行われた可能性が十分ある。
5．温石（おんじゃく）平・ナベイシ谷・ホゲット・マブノクチ等、石鍋製作になんらかの関連ある地名が残り、それらを、今後とも蒐集検討する必要がある。

6．製作所遺跡および周辺には、小祠があるものがあり、なんらかの禁忌が存していること。

○現地踏査

従前に知見ある製作所遺跡および、聴取り作業によって情報のよせられた箇所を中心に実施した。

1．踏査結果の整理項目は、①地籍②現状③規模④土地所有者⑤鉱業諸権設定の有無⑥その他、とした。

2．遺跡の位置は、50,000分の１の大瀬戸町図に記録した。

3．踏査に当っては、河川との位置関係に留意し、遺跡への経路にも注意した。

4．踏査記録は、前出の項目のほかは写真撮影にとどめた。フイルムは、モノクロームおよびカラーリバーサルを用い、一部、カラープリントを用いた。

5．遺跡名は、従前の知見あるものについては、全国遺跡地図所収の名称に合致するかぎり、その名称を生かした。但し、一遺跡として把握されてきた遺跡のなかで、複数箇所の遺跡を有するものについては、主名称はそのまま残し、以下、○○遺跡第○地点等として区分したものもある。

6．一抱え程度の岩塊に、石鍋製作の痕跡あるものが散見されたが、これらについては収録から除外した。

7．今回踏査によって分布図に収録した遺跡数は、８箇所であり、その中で新しく確認したものは３箇所である。

8．最重要遺跡として選定した遺跡は、同町羽出川郷ホゲット遺跡である。同遺跡は、別項で詳述することになるが、

① 遺跡規模が独立した山塊13haにあり、150m ×200m の範囲に11箇所の製作所遺構が群在し、最大規模をもつ。

② 滑石岩塊、滑石岩壁（露頭）、クレバスの両岩壁という多様な遺構が群在している。また、製作過程で排出される石屑の状態もよく残り、石鍋製作遺構のセットが、よく残っている。足場穴や、滑石層の厚みをみる試験掘り跡、工人の往還に利用したと考えられる足跡列も残っている。

という諸点にすぐれる所から、選定と重点記録の対象とした。

○最重要遺跡（ホゲット遺跡）の重点記録

1．地形実測は大瀬戸町森林基本図（2500分の１）を基礎とし、トラバース法によった。

各遺構配置状況も、本図に記入した。

2．本遺跡の中で最大規模をもつ第６製作所の北壁の一部について平面図およびクレバス断面図を20分の１で作成した。

3．各製作所遺構（第１～11）の記録は、写真撮影および観察記録とした。観察記録の項目は次のとおりである。

① 単岩塁か複岩塁（クレバス）あるいは、岩塊か。

② 製作岩塁の規模及び滑石層の厚み、傾斜。

③ 石鍋製作工程の第１段階（メッシュ割りつけ）の存否とメッシュ規模。

④ 滑石層に接している岩層

⑤ 石屑等の排出によるボタ山の存否

⑥ その他

4．第６製作所跡については、両岩塁の間に充填した排土層の試掘を実施した（試掘壙規模１ｍ×２ｍ）

（正林）

大瀬戸町内石鍋製作所遺跡

凡　　例

1．所　在　地

2．位　　置

a　　cm（国土地理院5分の1図の東北隅からの距離）

b　　cm（同図東南隅からの距離）

3．所有区分（現状）

4．遺跡の概況

第5図　大瀬戸町所在石鍋製作所遺跡分布図

①大屋岩石鍋製作所遺跡

1．西彼杵郡大瀬戸町瀬戸羽出川郷大屋岩6755

2．a 19.1cm、b 27.4cm

3．松下八郎氏（山林）

8．雪浦川中流域に北西方向から合流する羽出川の東岸に位置し、独立岩塊の観を呈する。高さ約４ｍの岩陰状に削りこまれ、壁面調整の跡を残している。現在、薪木等の収納場所として利用されている。現地標高約70m。

②ドンク岩石鍋製作所遺跡

1．西彼杵郡大瀬戸町瀬戸羽出川郷ドンク岩13

2．a 15.9cm、b 27.4cm

3．隅田弥四郎（山林）

4．ホゲット遺跡に近接する山林中に屹立する岩壁に石鍋製作の跡が残っており、岩壁の高さ約10m、幅約10m。岩壁直下は水田が営まれており、岩壁直下の凹みや、ズリ（廃石）の堆積等不明。標高約80m。

③万助山石鍋製作所遺跡

1．西彼杵郡大瀬戸町雪浦久良木郷

2．a 18.3cm、b 19.1cm

3．国有林（山林）

4．標高300ｍの険阻な山中にあり、幅約10m、高さ約８ｍの屹立する滑石の露頭壁において、壁面調整の痕跡が顕著である。また、石鍋製作の状況もよく残っている。岩壁直下を林道が走っているため、岩壁直下の轍状の凹みや、ズリによるマウンド状の堆積も不明である。

図版４　万助山石鍋製作所遺跡

図版 5　万助山石鍋製作所の岩壁

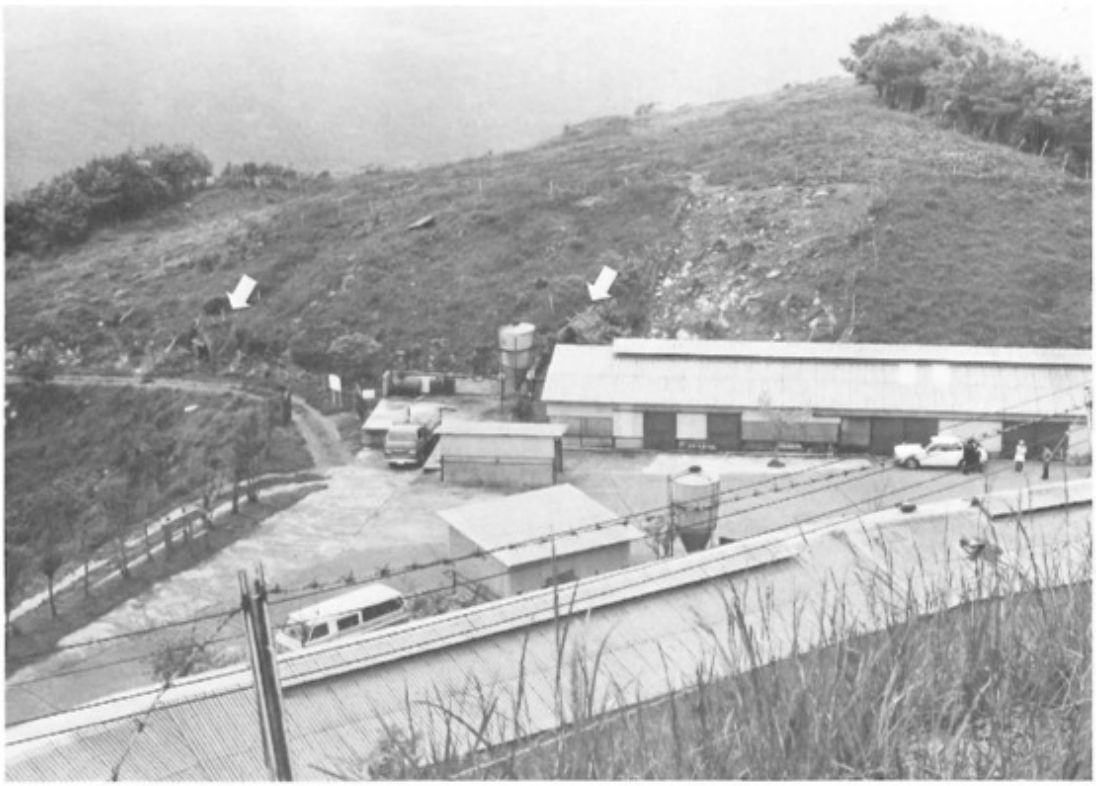
④飯盛山石鍋製作所遺跡

1．西彼杵郡大瀬戸町雪浦幸物郷ボウフラダヲ470

2．a 16.0cm、b 21.1cm

3．親和銀行（牧場用地）

4．町の東辺、同郡琴海町に接する約500mの高所にあり、西彼杵半島の東西岸を眺望し得る位置にある。坑道掘りの製作跡が2か所あり、銀行の牧場管理者によって保護されている。坑道は狭隘で、人が一人、かがんで入れる程度であり、大規模な石鍋製作が行われたか否か疑問がある。



図版6　飯盛山石鍋製作所遺跡群

図版7　飯盛山石鍋製作所遺跡の坑道入口

図版8　作り出された粗型石鍋群（飯盛山）

⑤駄馬石鍋製作所遺跡

1．西彼杵郡大瀬戸町雪浦久良木郷駄馬

2．a 20.5cm、b 20.0cm

3．長崎県（山林）

4．雪ノ浦川下流に注ぐ河通川の上流域にあり、河通ダムの北東隅に近い。標高約200ｍの山中にあり、清流に岩塊が洗われている。岩壁の高さ約10m、幅約８ｍ。石鍋製作の方眼割付けの状態がよく残り、石鍋の製作痕跡もよく観察できる。

図版９　駄馬石鍋製作所遺跡

図版10　駄馬石鍋製作所遺跡における方眼割付けと石鍋製作状況

⑥目一ツボ第1石鍋製作所遺跡

1．西彼杵郡大瀬戸町雪浦河通郷目一ツボヲ429－1

2．a 22.2cm、b 19.0cm

3．大瀬戸町（山林）

4．先学、八重津輝勝氏の文献（考古学雑誌14－14、大正13年）記載の遺跡で、全国遺跡地図に、長崎26－25河通洞窟として収録されている。標高約330ｍの峻険な山塊の頂上近い急斜面にあり、山頂を占める岩塊の直下に開口している。壁面自体にも石鍋を剥離した跡があり、坑道内については口碑が多い。

図版11　目一ツボ第１石鍋製作所遺跡のある山塊頂上

⑦目一ツボ第２石鍋製作所遺跡

1．西彼杵郡大瀬戸町雪浦河通郷小野408－10

2．a 22.3cm、b 18.6cm

3．大瀬戸町（山林）

4．第１遺跡と同山塊にあるが、やや東寄りの急斜面にあり、滑石露頭面に石鍋製作の痕跡をよく留めている。付近に、結晶片岩の板状石を立て、約３ｍ×４ｍの方形にめぐらしたものがあり、石鍋製作との関連も考えられる。付近には、ズリが厚く堆積している部分がある。なお、石囲いの井戸跡があるが、現時点では時期等については明確でない。

図版12　目一ツボ第２石鍋製作所遺跡

⑧ホゲット石鍋製作所遺跡

1．西彼杵郡大瀬戸町瀬戸羽出川ドンク岩３番１

2．a 15.5cm、b 27.4cm

3．大瀬戸町（山林）

図版13　ホゲット石鍋製作所遺跡第６製作跡

ホゲット石鍋製作所遺跡

1．ホゲット遺跡の調査

今回の大瀬戸町内石鍋製作所遺跡についての詳細分布調査は、分布状況等を調査収録するとともに、遺跡の規模、内容にすぐれたものをえらび、より詳細な記録を実施し、保存策立案の資料とすることに目標があった。

ホゲット遺跡がその対象に選ばれたのは、同遺跡が単一の山塊中に多くの遺構群が保存よく残っていること、石鍋製作所遺跡が河川流域に立地するという条件をもっともよく具備していること、石鍋の製作工程がよく観察されること、石鍋製作の行われる岩壁の形状が諸種残っていること、立地する山塊の自然度が高いこと、町有山林中にあること等の理由によるものであった。

ホゲット遺跡についての調査は、遺構群配置状況を地形実測図に記録し、各遺構群についての写真撮影はモノクロームおよびカラーリバーサルフイルムを用い、一部カラープリントを用いた。なお第6製作所遺構（クレバス岩壁）内に充満した石屑等について試掘調査を実施し、岩壁高の把握と滑石層の厚み把握を試みた。（正林）

図版14　ホゲットの山塊と雪浦川

2．ホゲット遺跡の立地と環境

大瀬戸町のほぼ中央部を西彼杵背稜山地から西方へ、西彼杵郡最大の河川、雪ノ浦川が流れている。同川は中流域まで急流となり若い峡谷を形づくり、清流となる。中流域から急激に川幅がひろがり、流域に、わずかな平地を形成している。マブノクチなる地名が残り興味深い。「マブ」とは鉱山用語で採掘工を意味していることからすれば、石鏃工人群の集散と石鏃の集出荷のベースであった可能性がある。マブノクチより、やや下流寄りの地点には、雪ノ浦川の一支流である羽出川との合流点が見られ、両河川にはさまれる一帯が「ホゲット」なる字名のある地域である。この一帯には、ホゲット遺跡の他にも有力な製作所遺跡群がある。

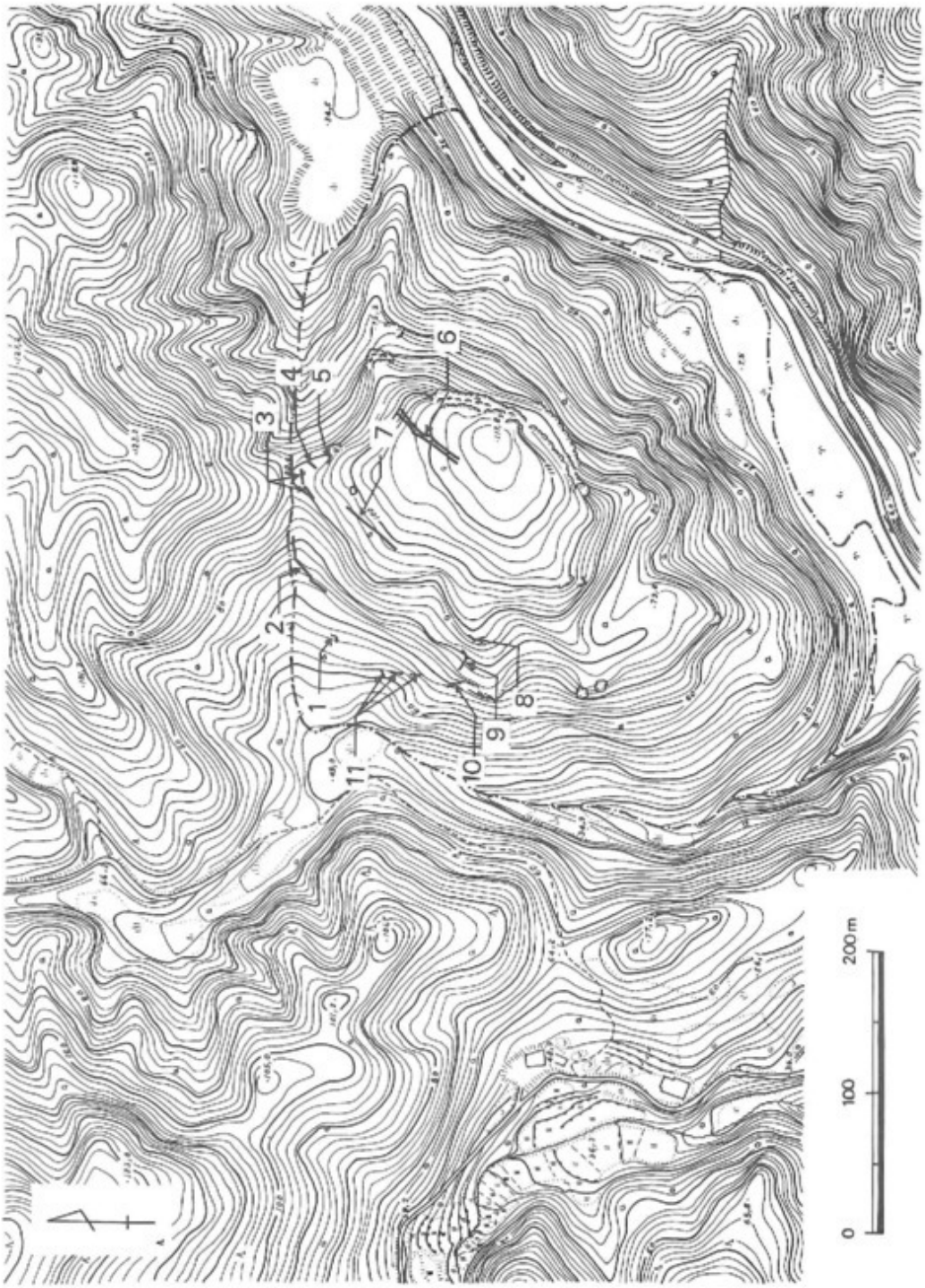
「ホゲット」の字名は石鏃製作にかかわるもので、「ホゲル・ホガス」(穴があく・穴をあける)という採掘行動を示す動詞と、「トウ、ツウ」(穴・洞)という名詞が複合したものと考えられる。

遺構群をのせる山塊は、全面積約13haのまとまりのよい山地形をなし、標高は約120mであるが、地形険阻である。特に山頂の東南部は屹立する岩壁をなしており、容易に人跡を入れぬ地形となっている。

遺構群は、同山塊の中央部に、東西約200m、南北約150m範囲に群在している。遺構

図版15　ホゲット山頂の蛇紋岩露頭と西彼杵の連山

群は、山塊頂上部の滑石露頭をめぐる状態で営まれており、自然度の高い雑木林に覆われている。（正林）



第6図　ホゲット石鍋製作所遺跡の製作跡遺構配置図

3．遺構群の形状と配置

今回の調査において①自然のクレバスにおいて、石鍋製作の行われている岩壁が相対峙するものと②単純岩壁において石鍋製作が行われているもの、あるいは③岩塊において小規模な石鍋製作が行われているものが確認された。各遺構には便宜的に第１～11石鍋製作所の名称を付したが、①の形状をもつものは第５・６・11があり、第１～４、第７～11号が②に属する。③の形状をもつものは第２製作所の一部にある。これら遺構群のうち、東半部に第３～６製作所があり、西半部に第１、８～11製作所がある。これら２群を結ぶ位置に第７製作所がある。なお、第３～５製作所と第７および第６製作所を結ぶ位置に「仙人の足形」と呼ばれる緩傾斜の滑石岩壁があり、各製作所に至る方向に、「足形」がうがたれている。「足形」の規模は、大要25～30cm、幅12cmほどであるが、交互に配置されている。滑り易く、歩行に際して、転倒の危険を回避する目的でうがたれたものらしく、周到な配慮が払われている。

石鍋製作にあたって、対峙するクレバスの両岩壁を利用する場合（第５・６・11製作所）は、石屑等の排出物を、クレバスと同方向に排出するため、クレバス内に大量の「ズリ」が充填している。本遺跡群においても最大の規模をもつ第６製作所（クレバス延長58m）

図版16　「仙人の足形」が刻まれた蛇紋岩露頭

図版17　「仙人の足形」

において、製作岩壁の高さを把握する目的で実施した試掘の結果によれば、深度３ｍ（岩壁上端から８ｍ）に至っても製作岩壁の下端に到達していない、という一事をもってしても、その壮大な規模が理解できよう。

一方、単純岩壁を石鍋製作に利用する場合（第１～４、７～11製作所）、滑石露頭の上から下への順序で石鍋製作が行われるため、岩壁の下端には岩壁に並行して、車の轍状の凹みが生じていることが確認された。この凹みの後方には、排出された石屑等のズリが堆積して、マウンドを形成していることも確認されている。単純岩壁における遺構の単位は、このような、岩壁と轍状の凹みとボタ山のセットで把握すべきであるとすれば、ホゲット遺跡の石鍋製作所遺構の数は、更に増加することになる。

ホゲット遺跡の場合、滑石の露頭は、多くは蛇紋岩層に付着する層として認められるが厚みは数cmから50cm以上に及ぶ部分があり、滑石層の厚みを試すための工具痕が観察されるもの（第２・６・７製作所）があり、滑石層の厚み不足のため製作を中止したもの（第７製作所）も観察されている。

（正林）

4．各製作跡の紹介

これらの製作跡群を整理して、ここではその概況と個々の現状ならびに観察結果を報告する。

東西、南北ともに400ｍの広さの範囲内に製作跡群を擁する山塊は、雪ノ浦川と羽出川の合流する地点の北部にある。北は標高82.6mのくびれ部で北部連山に連なり、東、南の方向は急傾斜をもって雪ノ浦川と接している。西側は羽出川と平行して流れる川が小渓谷を形成し、その上流にはホゲット製作跡発見の起因となった廃鉱がある。もともとの発見は昭和45年に当時はまだここで滑石採掘が行われていたのであるが、ここより長崎県立美術博物館に持ち込まれた資料を眼にしたことに始まる。その後数回の踏査を実施して資料の収集を行い、やがてホゲット工房址として紹介したのである（下川1974）。

今回の調査で名称を付した１～11までの製作跡は山塊の北部と西部に集中している。これは限られた日程と全山に渡ってうっそうと繁った灌木としだの林であったために調査が行き届かず、そのために片寄った傾向を示しているかも知れない。特に東と南側は岩塊が露出し、急激な傾斜であるために不可能であった。故に今後調査の中ではこれ以外の製作跡が発見されることは十分考えられる。

製作跡群は標高60mから山頂（標高117.8m）までに点在するが、大きくは第３・４・５製作跡と第８・９・10製作跡はそれぞれ一括して考えることができ、全体的には６つのグループに分けられる様相を示している。また地図の上におさえられた各製作跡群は、ほゞ等高線に添って走るものと、これに直交する形で存在するものの二種類となる。

〈第１製作跡〉

標高約66mのところに位置し、岩壁面にはとり残しの石鍋粗型と剝ぎとった跡がある。ここは北側から走ってきた滑石層がL字型に曲がるところで、ちょうど露出した層が尽きる先端部にあると言えよう。

観察では滑石層の厚さは約15cmほどを残して蛇紋岩層と接している。岩壁面の傾斜は約20度で緩やかとなっている。壁面には粗型をとり出すための40cm×45cmの区画割りが見られ、それを基にして加工のノミが加えられている。最終的には27cm×27cmのほゞ立方体もしくはそれに近い四角錐台形の粗型となって剝ぎとられた様相を見せている。また剝ぎとりの途中で放棄されて壁面に残る粗型の観察によれば、壁面からとり離すノミ痕は粗型の下の方へ打ち込まれており、このことは現在の地表面よりも低いところが製作時の地表面であったことを窺わせている。

この製作跡は滑石層の末端にあたるために活発な製作が行われなかったのであろうか、廃棄された削り屑の山も少なく轍状の掘り回みも弱い。

図版18　ホゲット第1製作跡

〈第2製作跡〉

標高75mに位置し、滑石露頭面の長さは50mを越える長いものである。層の厚さは約37cmで、下層には風化の度合が著しい蛇紋岩との接触が見られる。岩壁面は約70度の傾斜で直立に近いが、2mの高さで階段状をなして上部へ連なっている。

ここでの粗型製作の跡は滑石層の岩壁面はもとより、岩層より遊離した大きな転石にも行われている。壁面での割りつけは30～31cmの方形であるが、粗型はノミによっていずれも25～26cmの大きさへと小さくなっている。採掘壁面の前面には並行して幟状の凹みが走り、またその前面には廃棄された削り屑が山状をなして堆積している。

詳細な観察では採掘時に足場を組んだと思われる角柱状の凹みが眺められるが、これは当時の採掘がかなりの高い所まで及んでいたことが推定され、その後の土砂の流入によって埋没してしまったものであろう。使用された刃渡り4.3～4.5cmのノミが鮮かに残されている。

〈第3製作所〉

標高90mに位置し、今後詳細な調査を実施すれば恐らく第4、第5製作跡と一連のつながりを持つ可能性がある。

図版19　ホゲット第２製作跡の岩壁と掘り回みとズリの堆積

図版20　ホゲット第２製作跡における方眼割りつけの状況

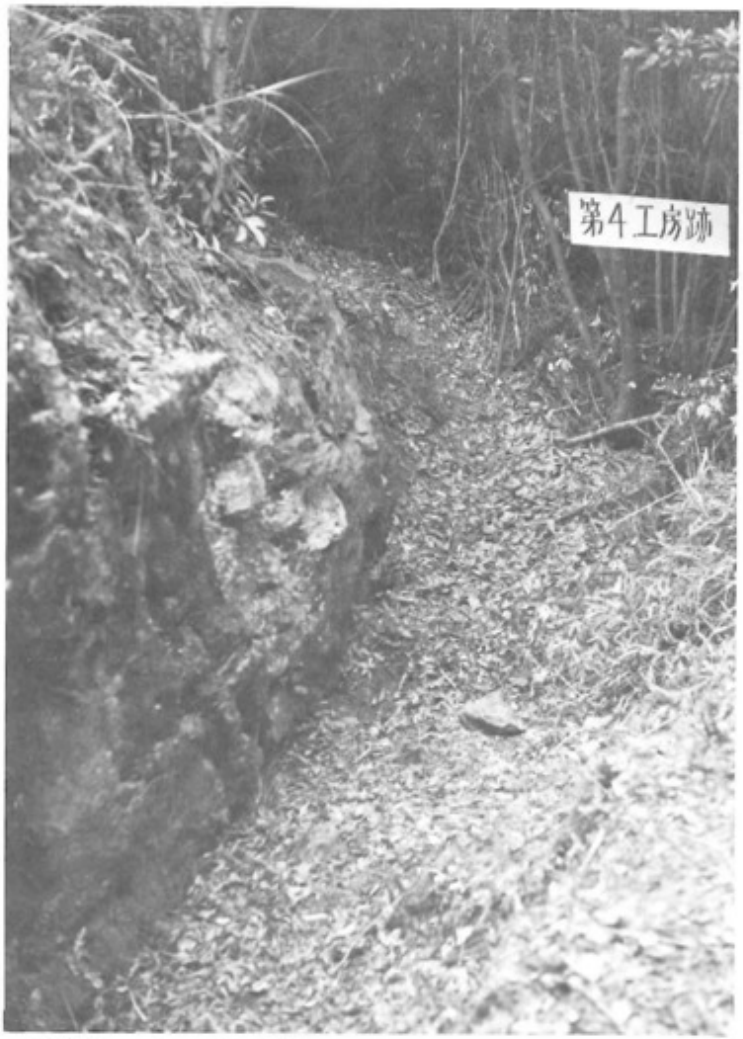
図版21　ホゲット第２製作跡における方眼割りつけの状況（転石）

図版22　ホゲット第３製作跡

岩壁面は約70度の傾斜で立っており、現状では地表から３ｍの高さを計る。この第３製作跡では写真22に見られるように岩壁面をいくつかの大きなブロックに分けて、その一画のみに集中して粗型製作が行われるといった方法が眺められる。範囲内の小割りつけは30㎝程度の区画をなしている。

〈第４製作跡〉

第３製作跡の裏側にあって壁面は直立している。現状では高さ2.5mの壁面のほとんどが、すでに滑石層は失われてしまって蛇紋岩層が露出している。わずかに残る滑石層の部分はとり残された粗型のところで、厚さは９㎝といった非常に薄い状態を示しており、仮に製作が継続して行われたとしても、ほとんど製品の段階までには壊れてしまうものと思われる。恐らくそのためにここでの製作を中止したものであろう。壁面に残された割りつけは約40㎝で、粗型は22㎝程度のもので完成されている。



図版23　ホゲット第４製作跡

〈第５製作跡〉

第４製作跡の南に在って、ここでは坑道掘りを行った採掘坑の入口が認められる。本来は滑石層の亀裂部から掘り始めたものと思われるが、坑内は土砂によって埋没しておりその規模は計り知れない。

わずかに入口附近にノミの跡が認められるが、剝ぎとられた痕跡からはおよそ42㎝程の割りつけの区画があったと言える。

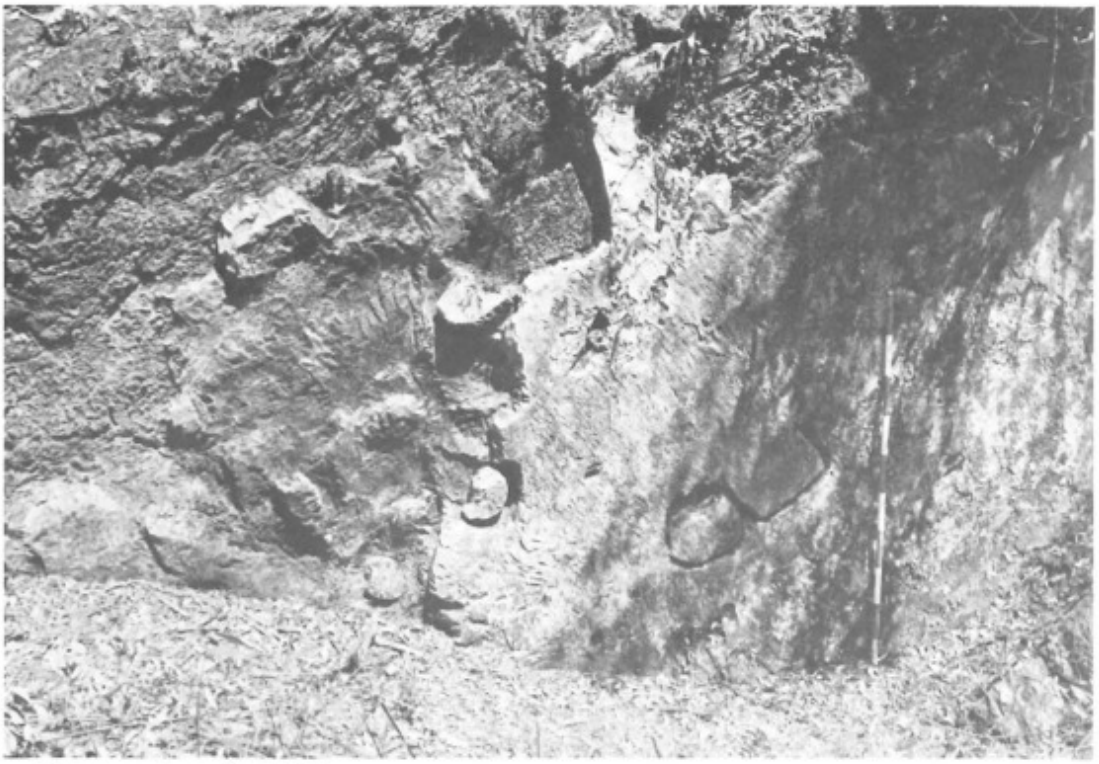
図版24　ホゲット第4製作跡の石鍋製作状況

図版25　ホゲット第5製作跡

〈第７製作跡〉

標高90～80mにかけて南西から北東に滑石露頭面がほゞ直立した形である。壁面の一部は連続する粗型製作によってオーバーハングしたところもあるが全長は約50mで、滑石層の厚さはところによってまちまちの状況である。恐らくそのためであろうか、壁面のところどころに層の厚さを確認するためと思われる小穴があけられているのが認められる。

壁面の割りつけは顕著ではないが、それでも一辺25cmの粗型を得るために45cm×35cmの大きさの区画を使用したことが観察される。この切り立った壁面と粗型が残っている部分を比較してみると、剝ぎとられた後の壁面には全面に渡ってノミによる調整が行われており、そこから再度粗型製作が実施されて行った様子を示している。しかし一定の区画を越えた大型のものは、これらに見られる一連の製作工程を離れて独自に製作されたことを示す状態が壁面に残されている。



図版26　ホゲット第７製作跡

〈第８製作跡〉

標高約90m の所にあって、ここから標高約70m まで下ったところの第９、第10製作跡とは一連のつながりをもつものである。東より北西に伸びるこのラインがあたかも等高線と直交するような姿で走っていることは、この滑石層に生じた亀裂を利用していることが判る。

滑石露頭面は少なくて部分的に顔を出しているが、そこには粗型をそのまゝ岩に残している。層の厚さは西から東にかけて厚くなり、薄いところで約12cm、最大は20cm程度を計る。露頭する部分はほとんど削りとられた最後の状態を示しており、壁面に付着する粗型の観察ではすでに蛇紋岩層にまで到達しているものがある。

ここでの製作によって生じた削り屑は、周辺の地形が比較的急傾斜をなしているところから、恐らく第９製作跡の方向へと流れて行ったであろうということを指摘できる。

図版27　ホゲット第８製作跡

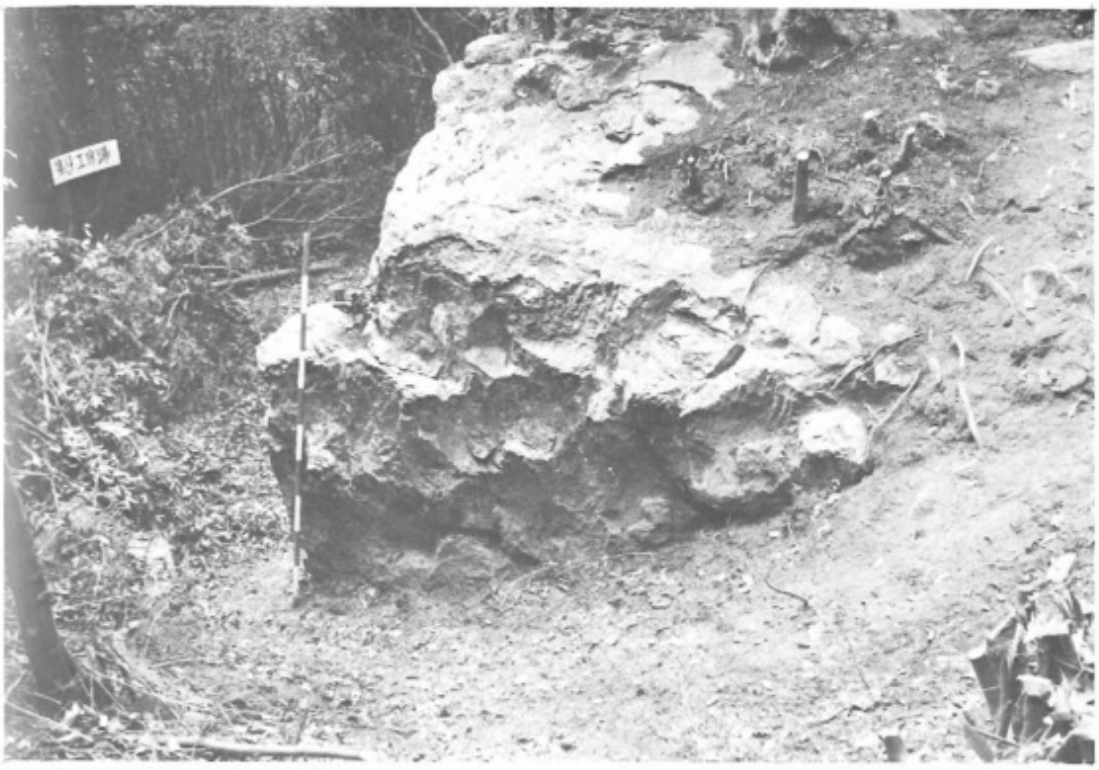
図版28　ホゲット第８製作跡における滑石と蛇紋岩の互層状態

〈第９製作跡〉

標高約80m、高さ約３ｍの壁面は粗型を剝ぎとった跡を到るところにとどめている。滑石層の厚さは約20cmであるが、粗型の大きさは判然としない。使用されたノミは刃渡り６cmのものである。

〈第10製作跡〉

標高70m にある。層の厚さは20～22cm程度で、瘤状の滑石岩塊の各所に粗型が見られる。粗型の大きさは一辺が30cmを越えるものと、20cmクラスの二種類がある。一部のものは併せられた二個体分（長方形）を切断しようとした顕著な切り込みを残すものがある。ここでのノミは約６cmの刃渡を有している。



図版29　ホゲット第９製作跡

図版30　ホゲット第10製作跡の全景

図版31　ホゲット第10製作跡の石鍋製作状況

図版32　ホゲット第10製作跡における石鍋のはぎとりあと

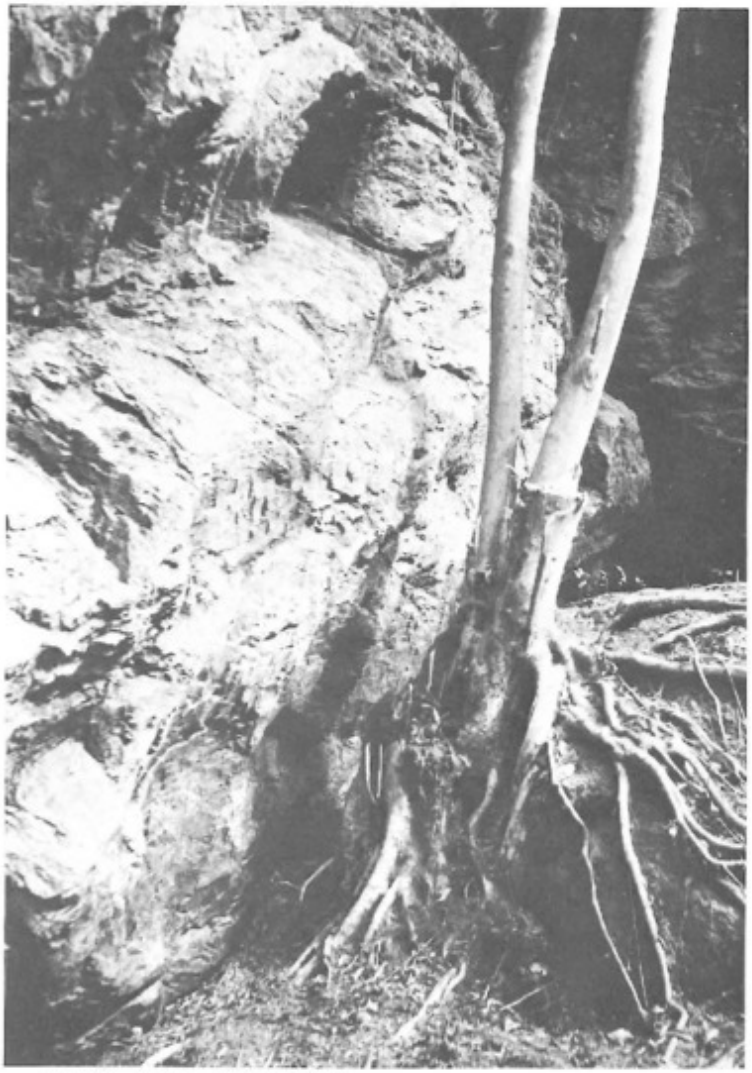
〈第11製作跡〉

標高70～60m にかけて南北に伸びる三か所より構成されている。

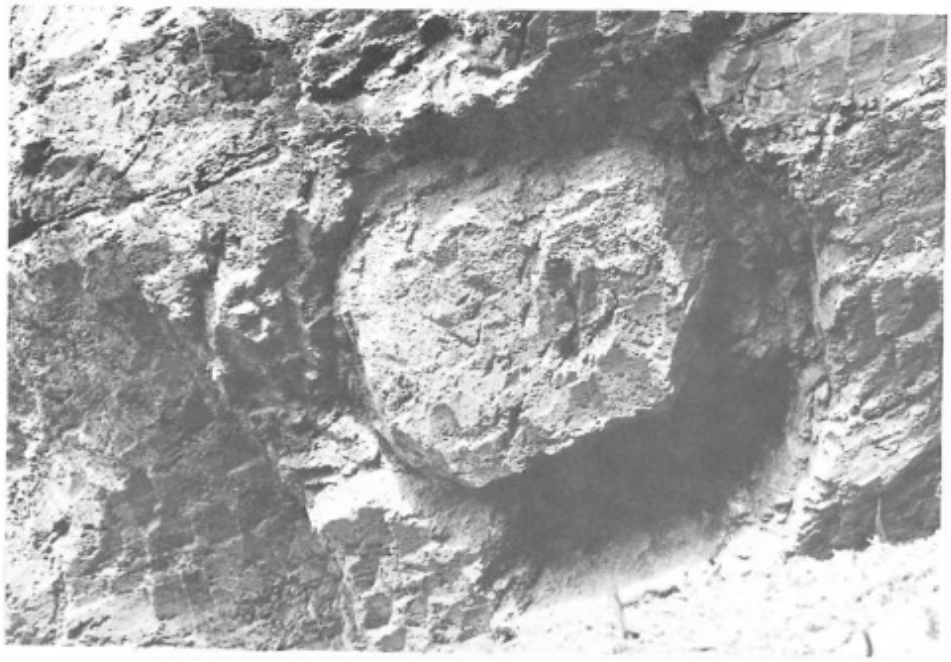
粗型の製作は壁面を利用したものと、坑道掘りによって進められたものとの両方が認められる。割りつけは部分的に見られるがそれは約40cmの区画であり、そのために使用されているノミは刃渡り約6 cmのものである。

この三つの製作跡は同時に並行して粗型製作が実施されたのではなく、製作の過程で徐々に移行して行ったということを堆積する排土の具合から見ることができる。

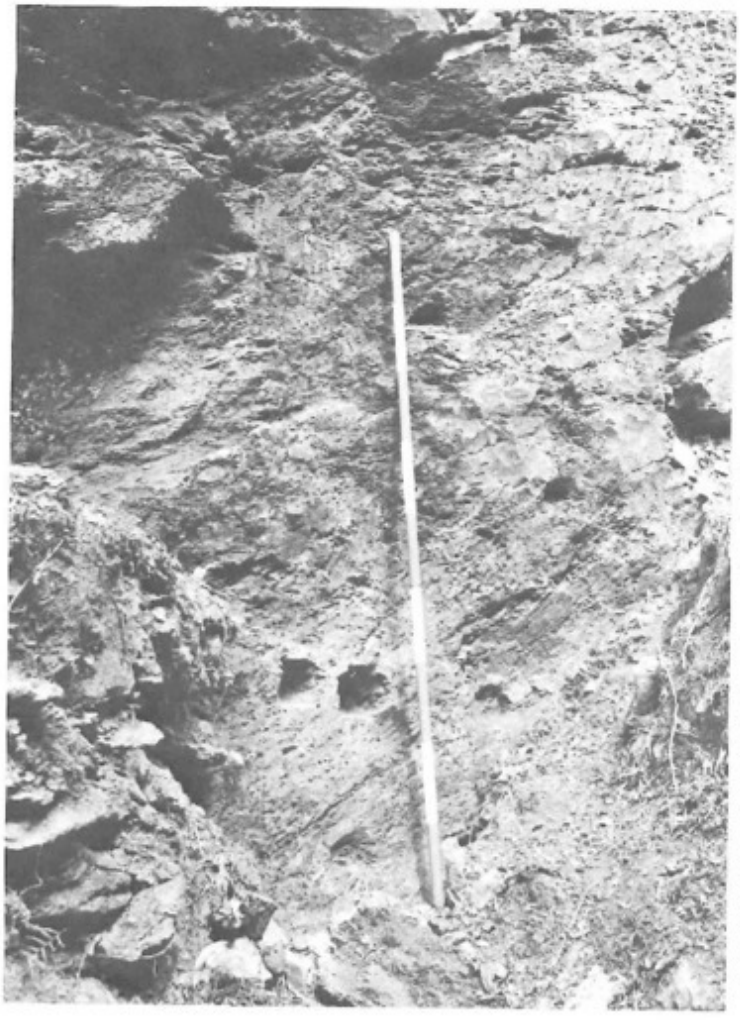
（下川）



図版33　ホゲット第11製作跡



図版34　ホゲット第11製作跡における石鏃製作と壁面調整状況



図版35　ホゲット第11製作跡における足場用の穿孔

5．第6製作跡の現状と調査

第6製作跡は山頂（標高117.8m）よりわずかに下ったところから北東に伸びた、ホゲット製作跡群の中では最大級の規模をもつものである。全長は約60mで、第5、第8製作跡と同様に滑石層亀裂部を利用している。

現状では北東の開口部（以後は入口と略す）付近に粗型製作の痕跡があり、2mの幅で相対する高さ約4mの滑石層両岩壁は無数のノミ痕や粗型、あるいは剝ぎとった跡をとどめている。この状況は入口より約20mほどのところまで確認されるが、それより奥は堆積した厖大な土砂によって計り知ることはできない。しかしそれでもかなり奥までも実施されていることは容易に推察できる。

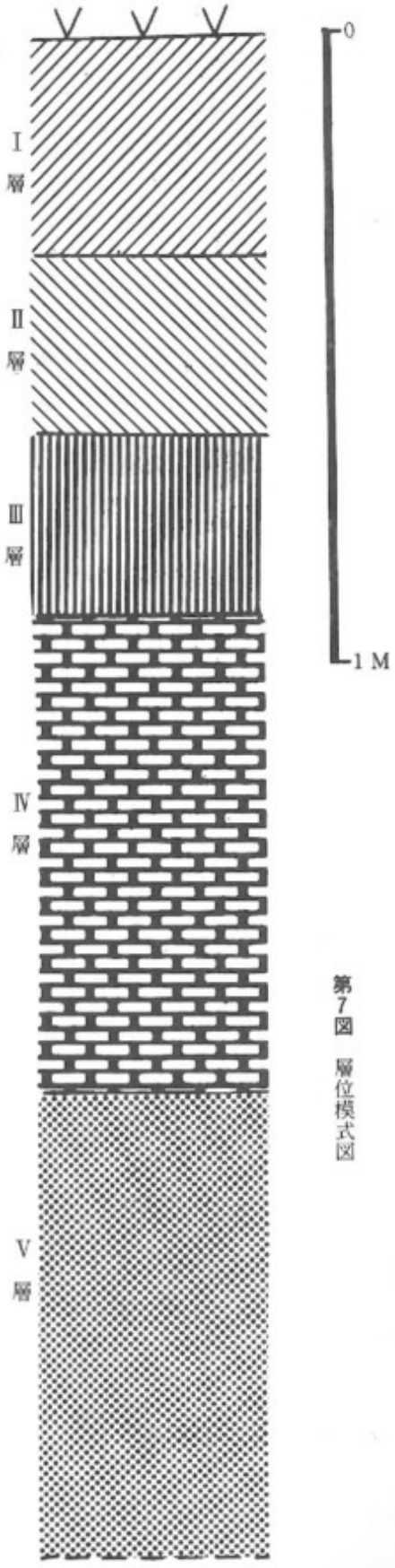
調査では当製作跡群の中でもその規模から、また現状の観察からしても最も良好な状態を保っているこの第6製作跡に焦点を絞ってみることとなり、そのために一部試掘溝を入れることと壁面の実測を行った。

試掘は壁面に残された石鍋製作の痕跡が、地表下のどこまで認められるかを重点に、入口部の北西壁に接して長さ5m、幅1mの発掘区を設定した。途中、土層が軟弱であるためにセクションにかかった大石の落下が心配されたので4.6mの長さで掘り進み、最終的には発掘区はせばめられて地表下3mの深さで大石群のために作業が困難となり中止した。

発掘の結果は基盤に到達するまでには至らなかったが、層序は5層が認められた。

〈Ⅰ　層〉

黄色土層で滑石の微細な粉末がそのほとん



第7図　層位模式図

どで、おずかに滑石小片も含まれてはいるが加工が認められるものはほとんどない。

〈Ⅱ　層〉

黒褐色土層で腐植土と滑石粉末が入り混ったものである。この層の最下面にたき火の跡一か所がある。加工された滑石片の出土はⅠ層と同様に少ない。

〈Ⅲ　層〉

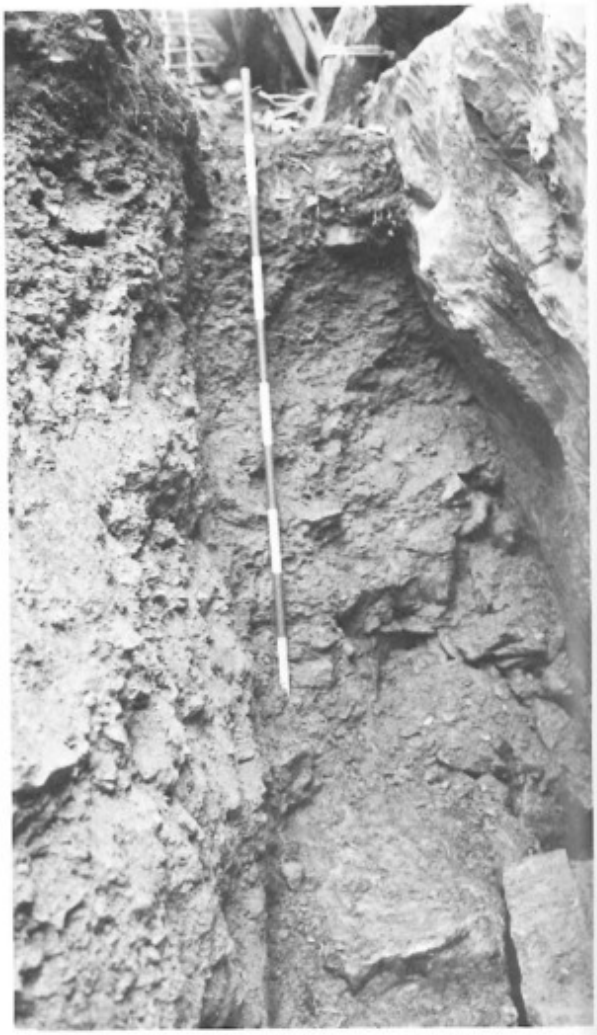
黄褐色を呈した滑石削り屑の層である。層中には粗型や石鍋失敗品が多量に含まれている。

〈Ⅳ　層〉

色調が黄白色であること以外は全くⅢ層と同様であり、重なり合った状態で石鍋失敗品が発見される。

〈Ⅴ　層〉

滑石、ヨウ輝石の岩石群でその中に滑石小片が上層から落ち込んだような状態で見られる。石鍋資料の出土はなくて下層に行くに従って岩石は大型化してくる。



図版36　ホゲット第６製作跡における試掘壙と層位

Ⅱ層最下部で発見されたたき火の跡は、岩壁に接して直径約1.2mのほゞ半円形を呈している。この範囲の土層は熱のために赤褐色となっており、その中央部には厚い炭化物の堆積と、接触する壁面には煤の付着が見られた。炭化物の堆積は約25cmの厚さで４つの層に細分されるが、このことはここで短時間のうちに４回にわたってたき火が行われたことを示しているに他ならない。またたき火跡からは炭化物の付着した小型石鍋が発見された。この資料は一部分を欠いているが、その器の内面は一般的に製作跡で眺められるようなノミの痕をとどめていないで、研磨の工程が実施されたものである。

今回の調査ではこのような石鍋の発見はこの一例にとどまり、その点では非常に注目される。即ち、このたき火は石鍋製作が行われていた時代に当時の人達がおこしたものか、あるいはその後の時代のものであるかである。その点ではこの石鍋が備え持っている特徴は重要視しなければならない。使用して壊れたためにたき火の中に捨てられたものか、ある

図版37　ホゲット第６製作跡試掘壙第２層におけるたき火跡と粗型石鍋出土状況

いはすでに地上に露出していたものがその後のたき火によって炭化物が付着したかと言うことである。この問題については炭化物の採集を行っているので科学的な年代値を出してみたいと思っているが、これら層位的な観察の上で得た所見も重要な意味を持っている。

まず発掘区の壁面に残されたノミ痕は現在の発掘下層面よりもなお下層に続いていることからすれば、これらの土層は石鍋製作時にここに生じたものか、あるいはその後に堆積したものである。また各層における色調の相異はもちろん腐植土層等の混入もあるが、雨水等による化学変化も当然考えられる。一般に滑石は青緑色を呈し、これが雨水などや風化作用によって白色または黄色に変化すると言われている。

そこでこれらの層を混入物等によって検討を加えてみるとⅠ、Ⅱ層とⅢ、Ⅳ層、それにⅤ層の三つに分けられる。Ⅴ層の岩石類の堆積はある一時期に近くの場所からこの地点へ移動してきた可能性がある。それはこの層よりもなお下層にノミ痕を有する事実と、当製作跡群で眺められるように粗型製作が滑石層の走り具合によって移動する傾向が認められるからである。あるいは製作に入る前に壁面調整を行い、その折に除去された突起部とも見ることができるであろう。Ⅲ、Ⅳ層は多量の石鍋未製品や失敗品を包含しているころから、石鍋製作が活発に行われていた時の層で、その過程で堆積したものである。なおⅠ、Ⅱ層は最下面のたき火跡が問題にはなるが、大きくは石鍋製作以後に堆積した土層である

ことは断言できる。

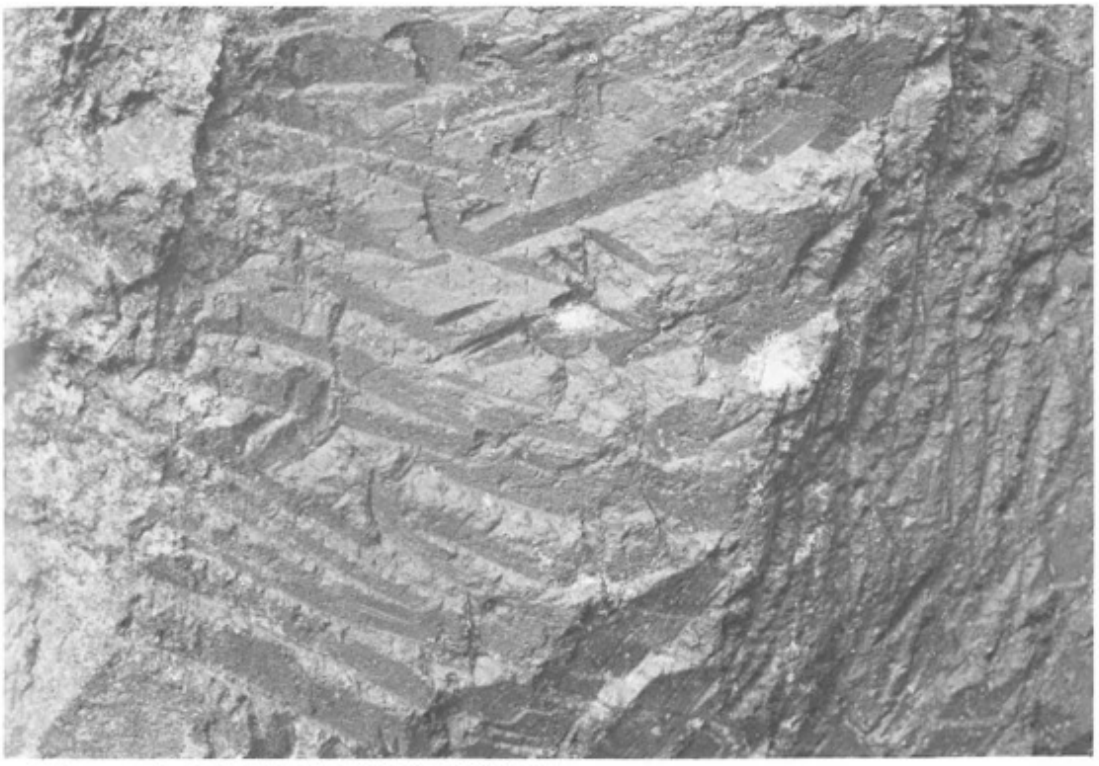
発掘区の壁面観察ではたき火の行われたラインの延長上には亀裂が走っていることが認められ、これを境として上部は粗型を多く残しているが、下層では粗型を顕著にとどめていないことが注目される。即ち、このラインは上下異った様相を示しているのである。壁面に亀裂部が走ることは恐らく一定期間に渡ってこのラインが地表面であったことを示しているに他ならないが、たき火によって黒く煤の付着した部分に粗型が見られることは上部の石鍋製作が実施されていた時よりも新しい段階にたき火が行われたことを語っている。

故にこの三つのことから今回の試掘で掘りあげられた土層は壁面にノミ痕がつけられた後の段階であり、たき火はⅢ、Ⅳ層の石鍋製作が盛んであった時期よりも遅かったと考えるのが妥当であろう。また壁面上、下部による観察結果の相異は時間的に長いへだたりがあったとは思えないが、粗型製作の工程が次第に変化して行ったと把握できるような要素を秘めている。

一方、入口より奥行10mまでにわたる露出した岩壁面の観察では北西壁の方に粗型が残っているものが多く、南東壁は無数のノミ痕をとどめている。しかも北西壁では残存する粗型も非常に高い所にあるものが多く、比較的低い所ではそのまま剝ぎとった直後の様相を見せている。このことは下から上の方に製作の順序が進んで行き、やがてこの製作跡が

図版38　ホゲット第6製作跡の北西壁

図版39　ホゲット第６製作跡の南東壁



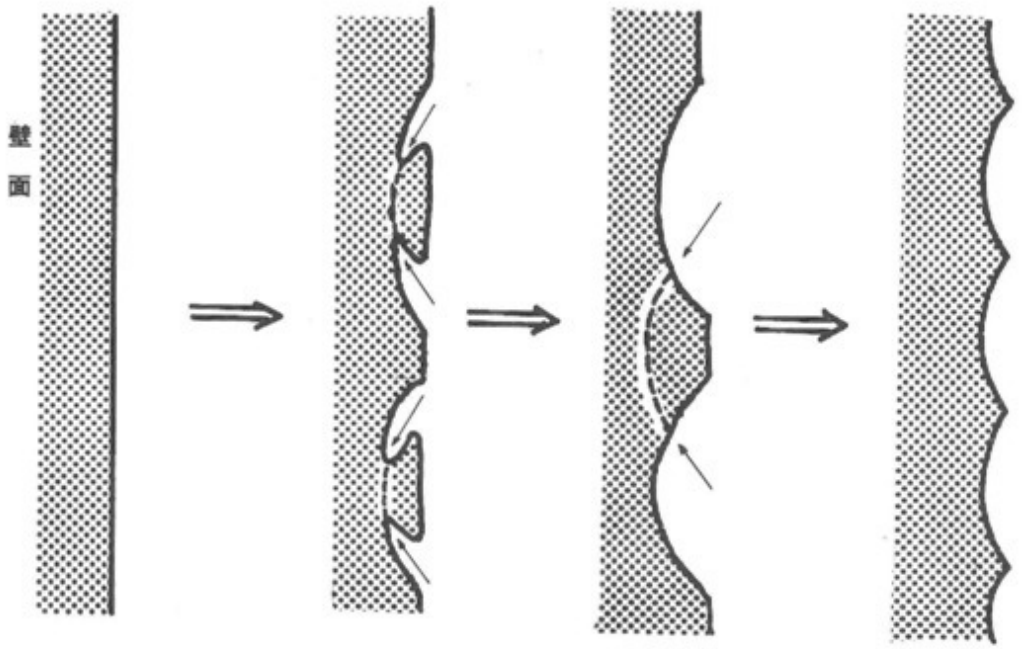
図版40　ホゲット第６製作跡の南東壁の調整ノミ痕

利用されなくなった段階を示していると言える。それはわざわざ粗型の形成までは実施しているのであるからして、たゞ単に高所であるために作業に困難をきたしたという理由でもあるまい。

粗型製作はここでは基本的には滑石層の走りに添って実施されているが、他の製作跡に見られるような割りつけの区画を行ってから剝ぎとるといったものは認められない。それにかわって第8図に示すような異なる製作法が推定される。まず形造られた粗型は岩壁から剝がすために数多くのノミが打たれて行く。このために粗型のまわりには溝ができ、やがて剝ぎとりが終了した段階には凹部となって残ってくる。この行為が何回も繰り返されると壁面にはたくさんの凹凸ができあがり、この凸部をそのまゝ、あるいは若干の手を加えて粗型として剝ぎとるのである。そのために粗型は従来まで言われてきたような必ずしも壁面に対して、やがて製品になった折の口縁部あるいは底部といった一定の方向性をもったものではなくてその両者が生み出されてくるのである。（下川）

6．石鍋製作工程

石鍋の製作工程とするよりも本来は粗型製作工程とするのが妥当であると思われるが、ここでは今日まで使用されてきた名称をそのまゝ踏襲して行く。その工程についてもすで



第8図　粗型剝ぎとり過程図

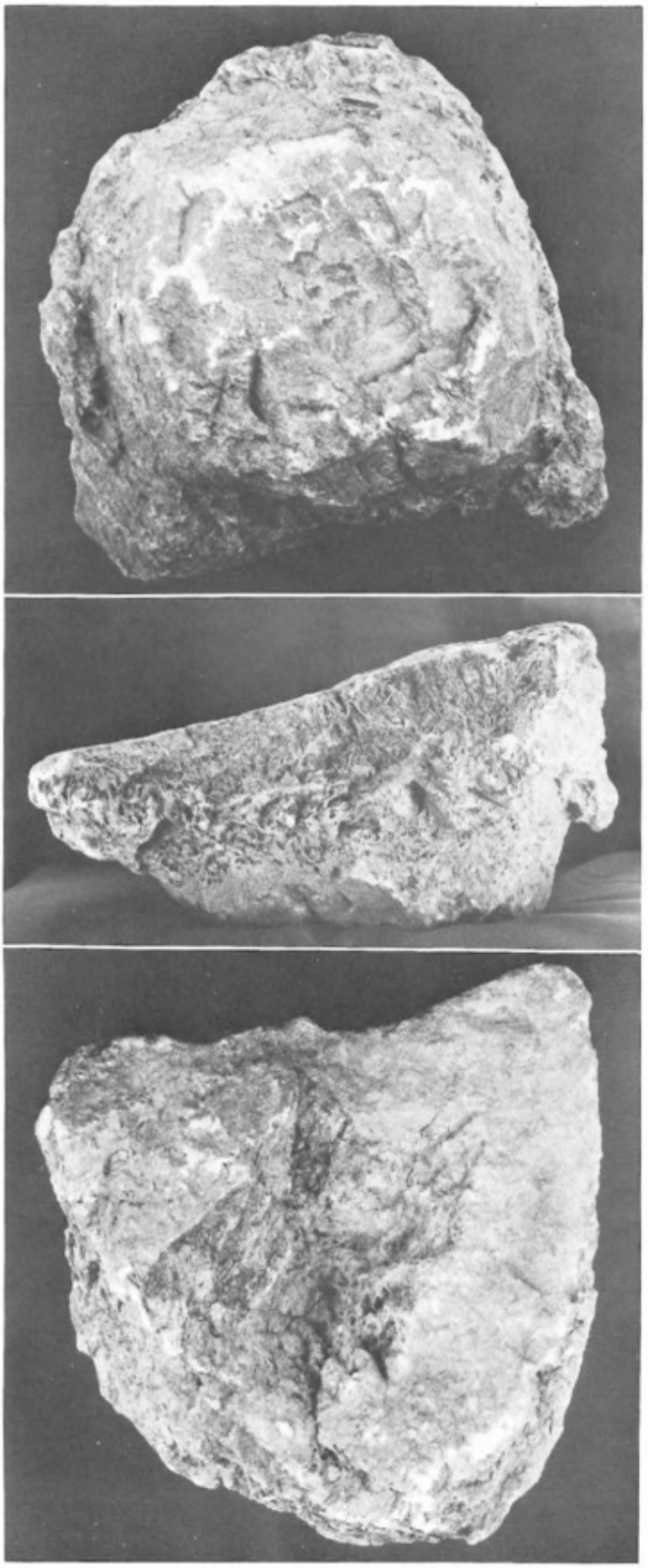
図版41　ホゲット第６製作跡の北西壁最上部における石鍋製作状況

に各種の見解が出されて図式化も計られているが（内山1923、副島1970、下川1974）、今回の調査では異なる様相も見られたので新たにここに記しておこう。

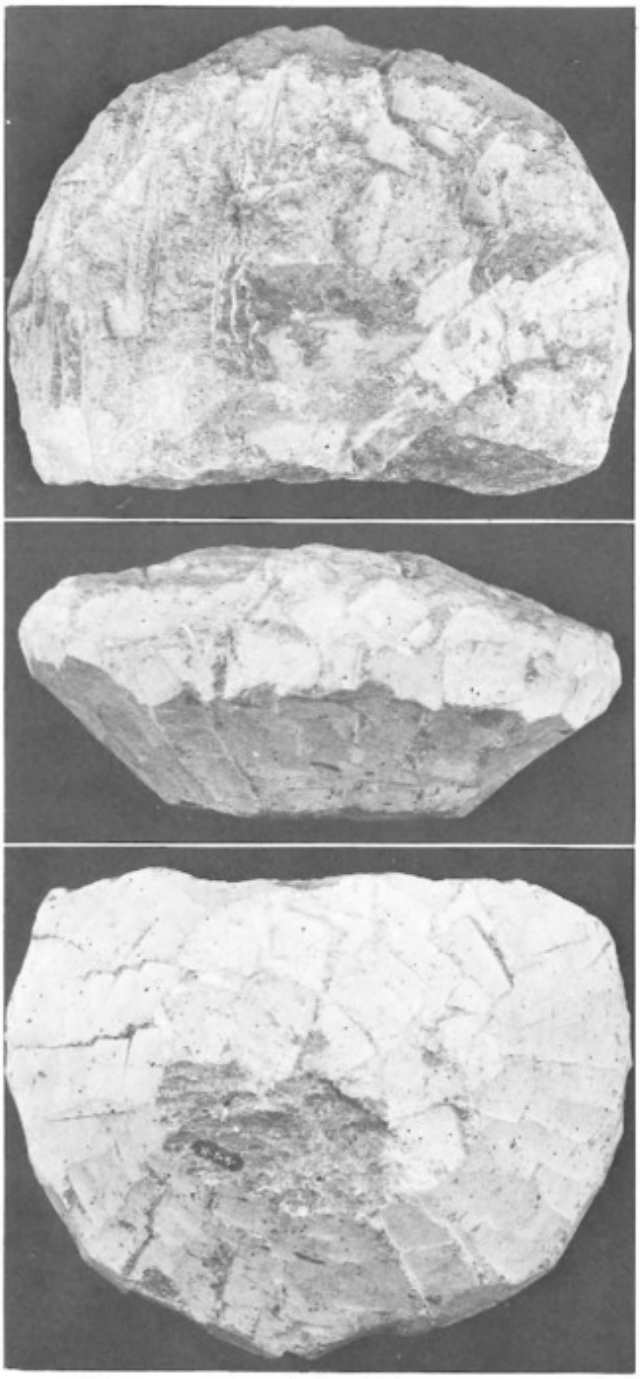
製作についてはまず滑石露頭部の発見とその保有量の確認にある。当山中はもとより西彼杵半島の各所に露頭部は見られるが、必ずしもそのいずれもが石鍋製作の痕跡をとどめているとは限らない。多くは河川に面した露頭が利用されていることは、すでに製品の運搬についての利点からではないかとの見解を出してはいるが、一方では河川の浸蝕によって露頭した滑石層の発見から、良質でしかも埋蔵量の多い場所への糸口になったとも考えられる。製作について良質のものが求められることは当然のことであり、それでもなおかつおびたゞしい失敗品の存在やその共通する壊れかたからも窺われる。

そこで適当な露頭面が確認されると、そこから粗型の生産が開始される。この場合は区画の割りつけを行って実施するものと、層の走りに添ってある程度自由に行ったものがある。割りつけも粗型となる最小単位の区画のいくつかの集合を示しており、製作が進むにつれて順次移動している。この状況は第２製作跡の写真によく現われている。製作跡での観察では区画割りが見られるものは比較的壁面がノミによって平坦に調整されている。

粗型は基本的には四角形を呈し、（図版42）その大きさは一辺30～50cmまでである。これより大きなものについては量産化は行われておらず、時折生活址遺跡で発見される大型のものは自由な形をもってして実施されたものと思われる。次に割りつけにノミが打たれて



図版42　方形型を残した粗型石鍋



図版43　ソロバン玉型の粗型石鍋

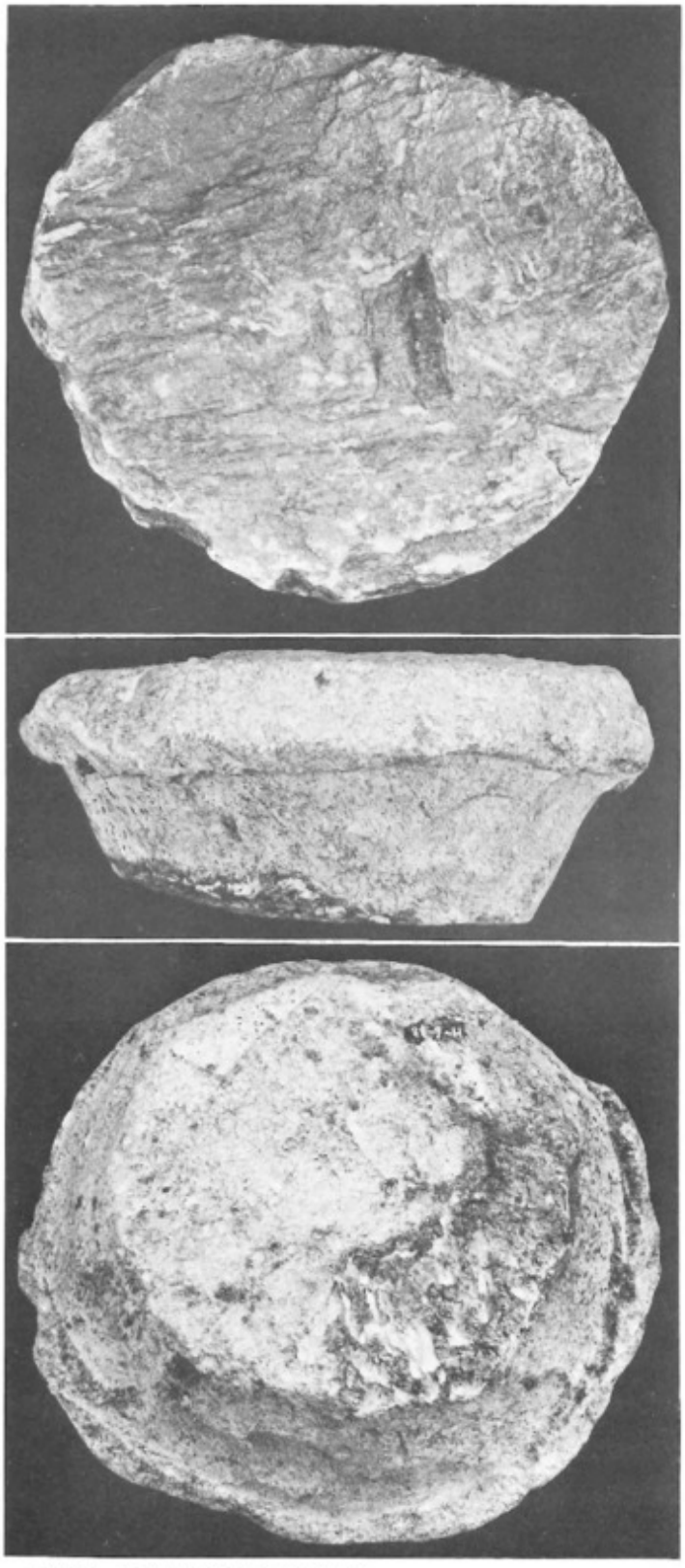
次第に粗型が形造られて行くが、この工程で粗型の大きさは20～30cmほどの四角や四角錐台形あるいは円形となっている。この段階において第6製作跡に眺められるような特異な製作法があるが、この二つの製作法は同時に並行して実施されていたものではなく、あくまで割りつけを行って開始するものが基本である。試掘溝の壁面下部に見られるノミ痕のみの状況は、この製作法が古くてその後にこれにかわって自由に粗型製作が行われる方法が生み出されることを示しているであろう。

壁面より剝がされた粗型（図版42）はただちにその場所か、もしくは近い所で石鍋粗製品として仕上げられている。このことはおびただしい削り屑と未製品や失敗品が散乱することによって証明している。とり剝がされた粗型は調整が加えられて算盤玉状の形が作り出される。(図版43) この折の突起部が次第に製品を巡る鍔として加工されるわけであるが、(図版44) 同時に容器の内側となる部分を作るためにノミが打たれて行く。(図版45、46) この場合にノミは対象物に対して直角の状態で打たれて行き、そのためにノミ痕は数多くの直線となって存在している。この時の力の具合が微妙であり、欠損品のほとんどがこの工程で生じ

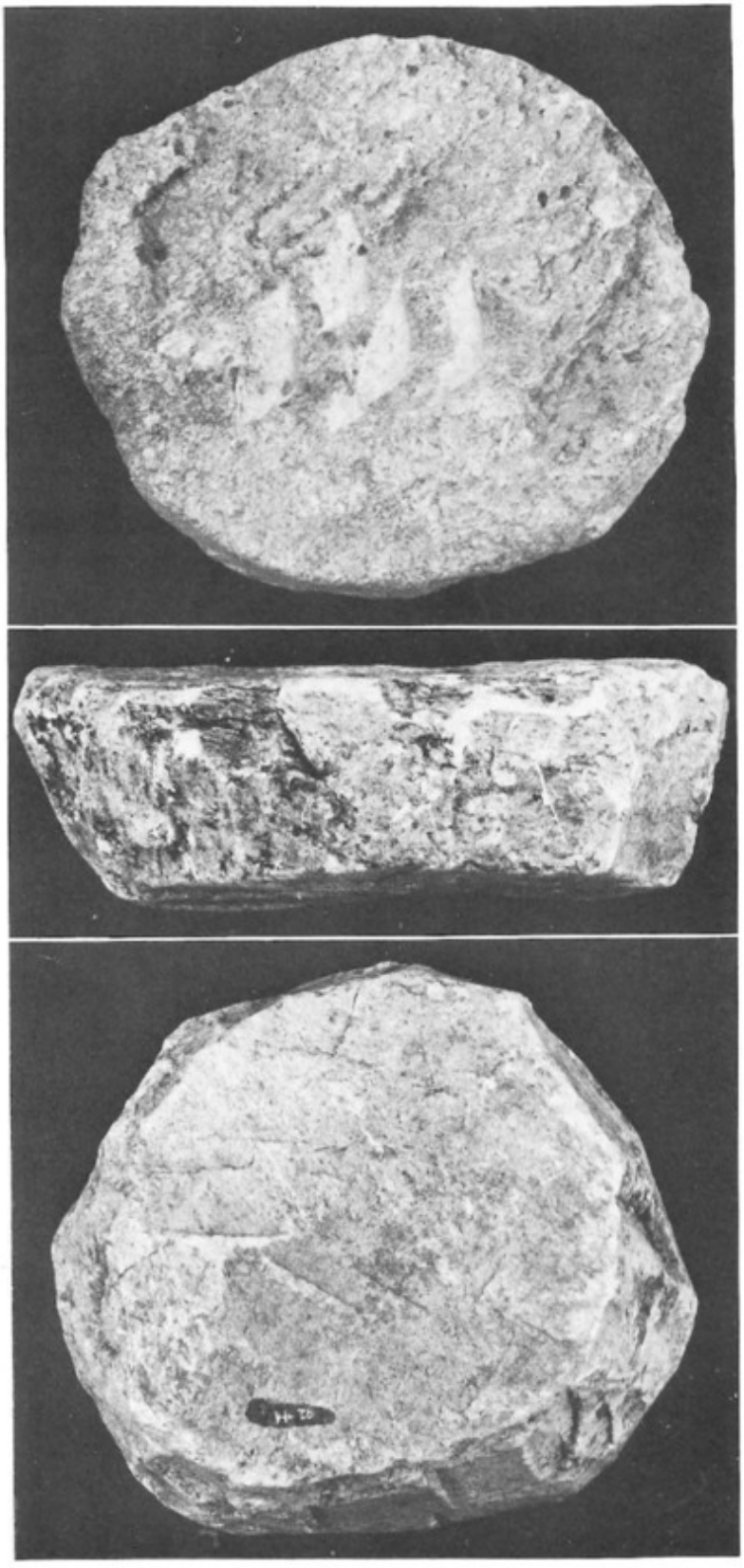
ている。(図版47) 内部くり抜きが完了すると器の全面に細かい調整が加えられて石鍋粗製品として完成する。この一連の工程で使用されているノミは、製品に残された跡から刃渡り約3cmのものだけである。(図版48、49)

やがて荒加工の石鍋粗製品ができあがると最終的に研磨仕上げが行われるのであるが、ホゲット製作跡群はもとより西彼杵半島一円で眺められる工程はここまでである。その後の研磨の工程がこれら製作跡群を離れたところで実施されたということは研磨の施された失敗品の発見が無いことによって裏づけられるのであろう。

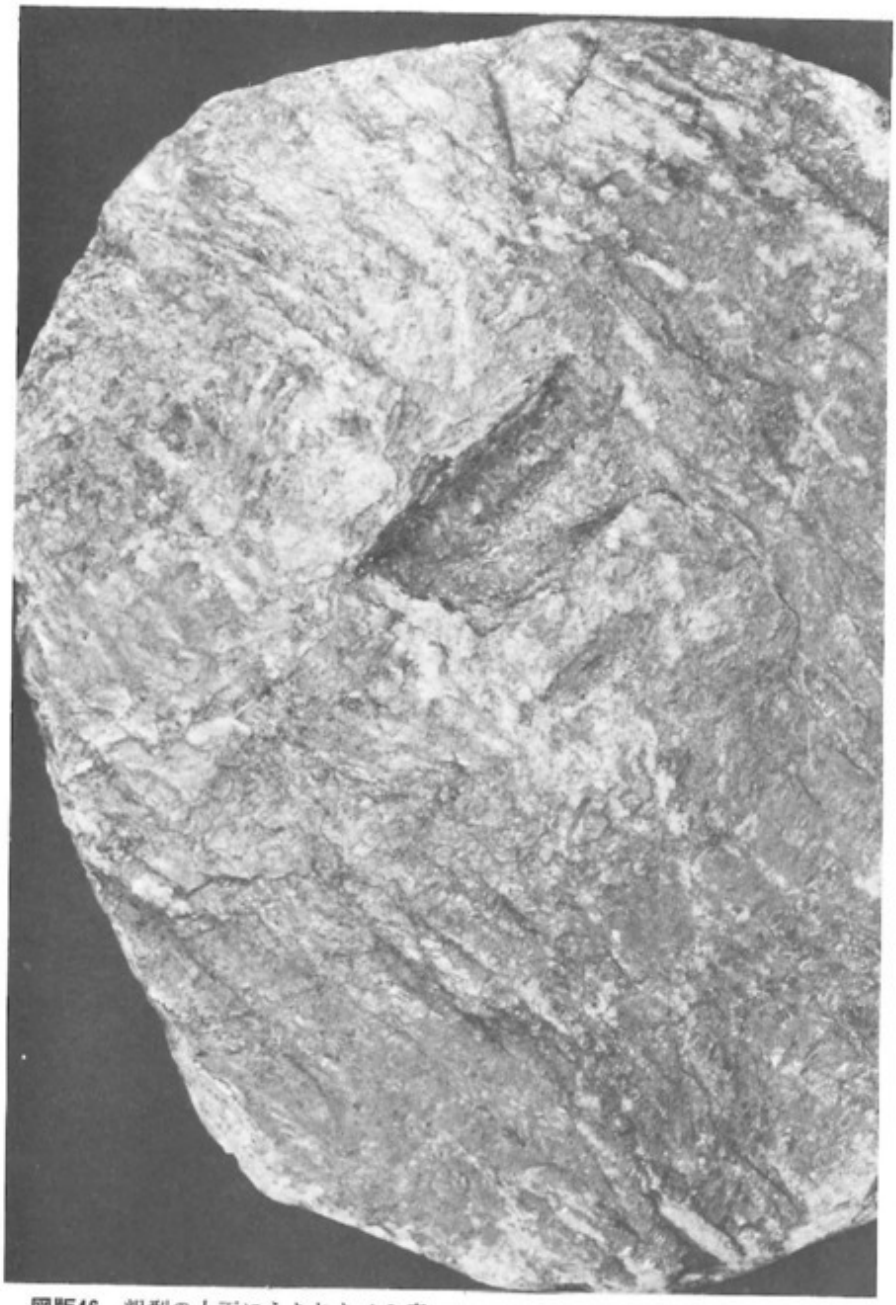
(下川)



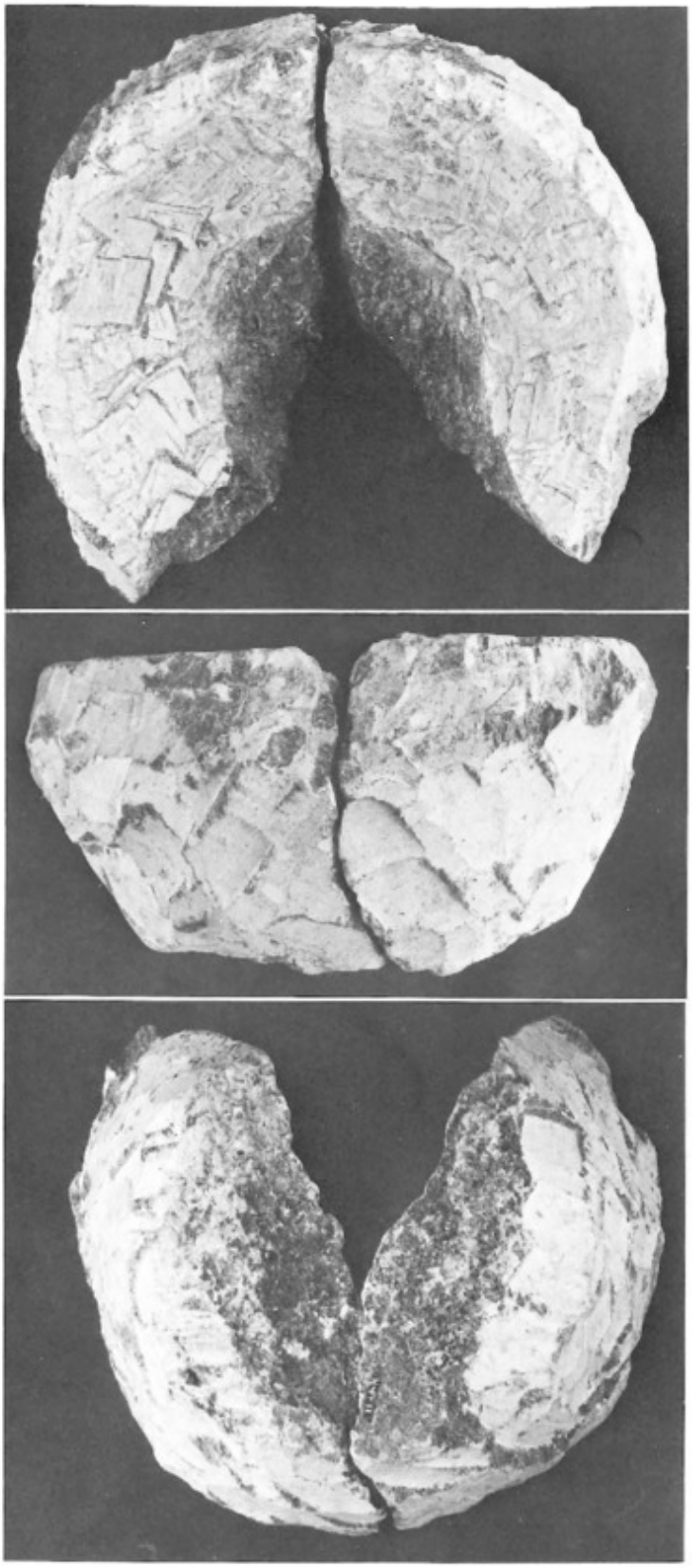
図版44 鍔を作り出した粗型石鍋



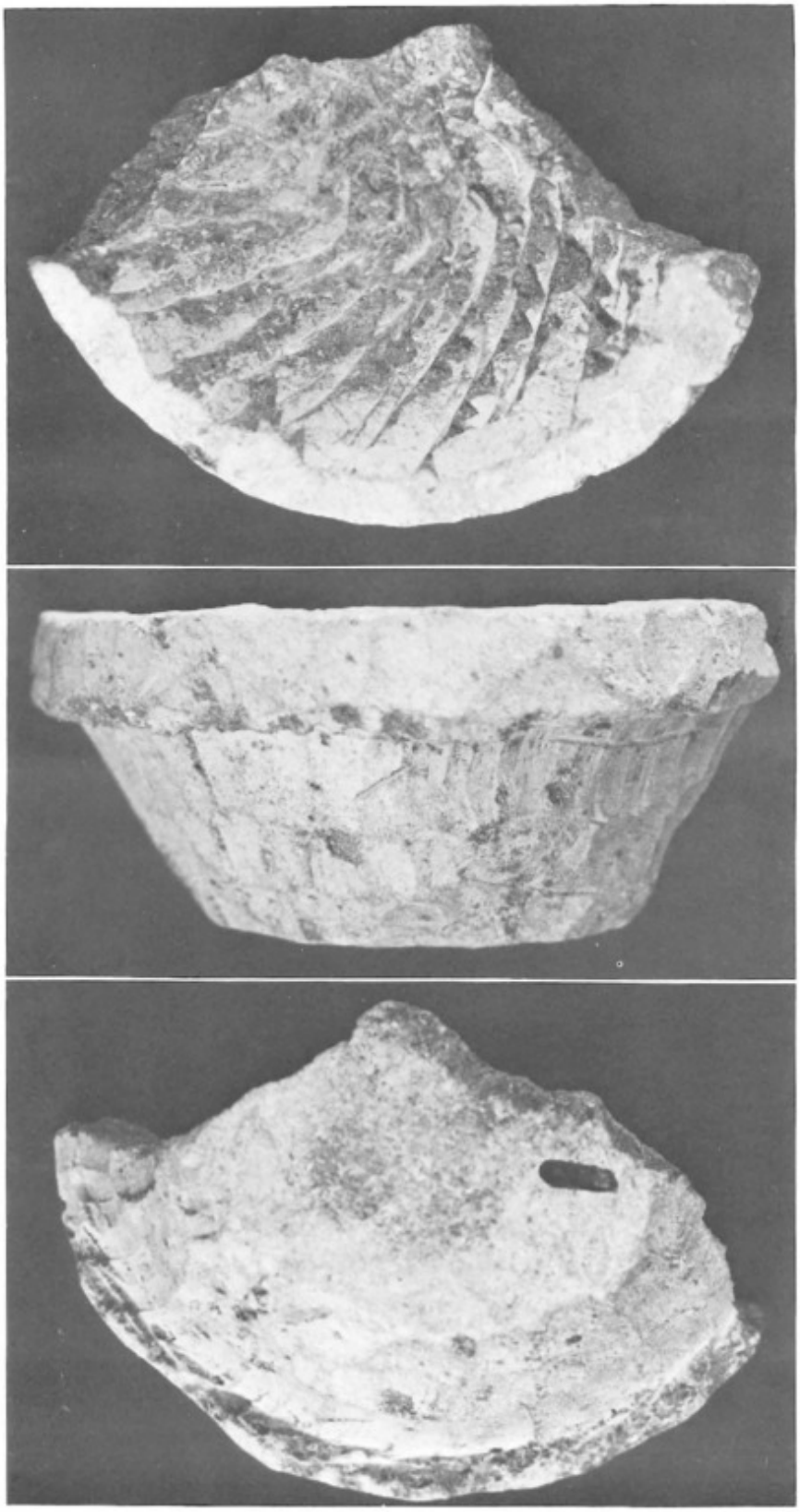
図版45　粗型石鍋



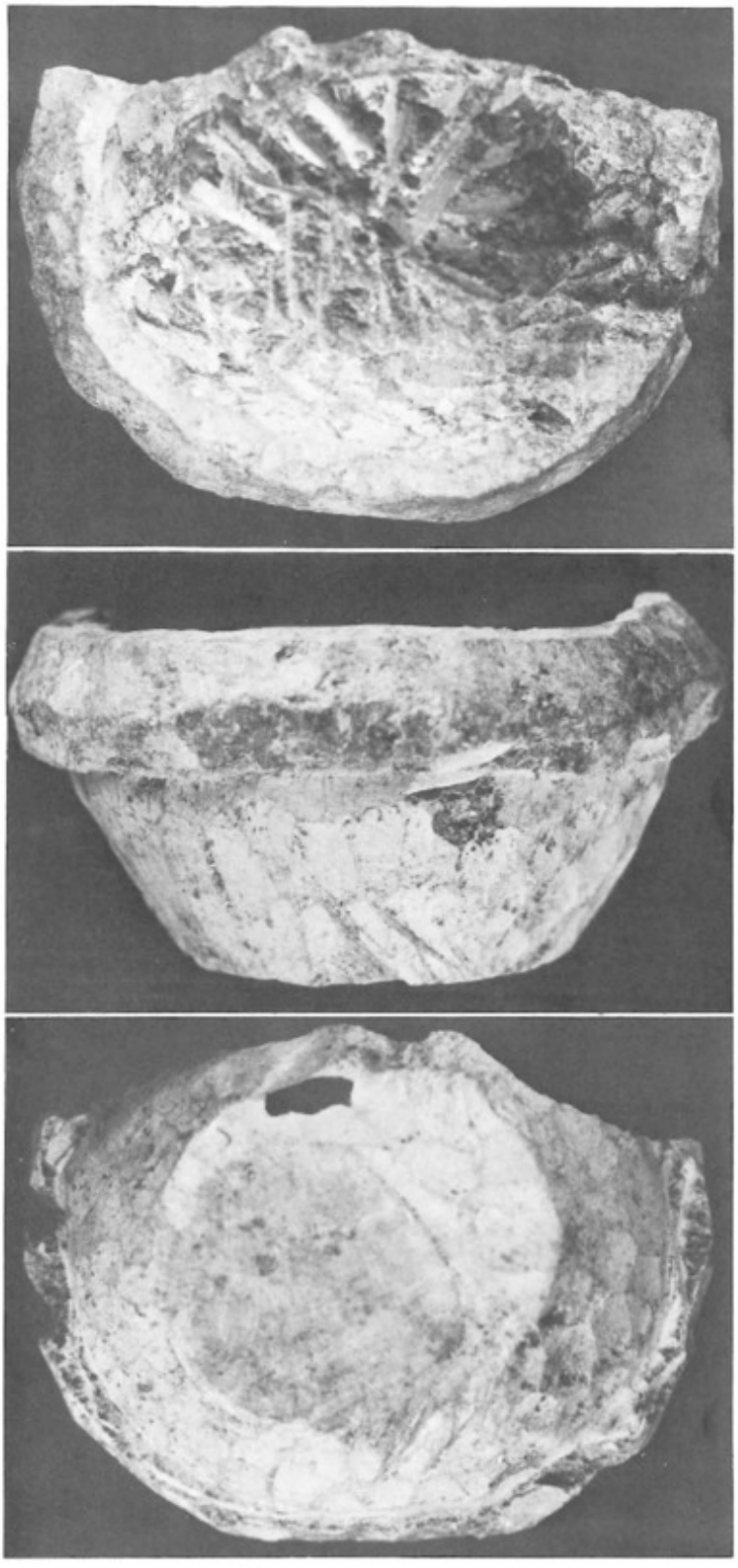
図版46　粗型の上面にうたれたノミ痕



図版47 内部加工に失敗した粗型石鏃



図版48　内部加工の状況

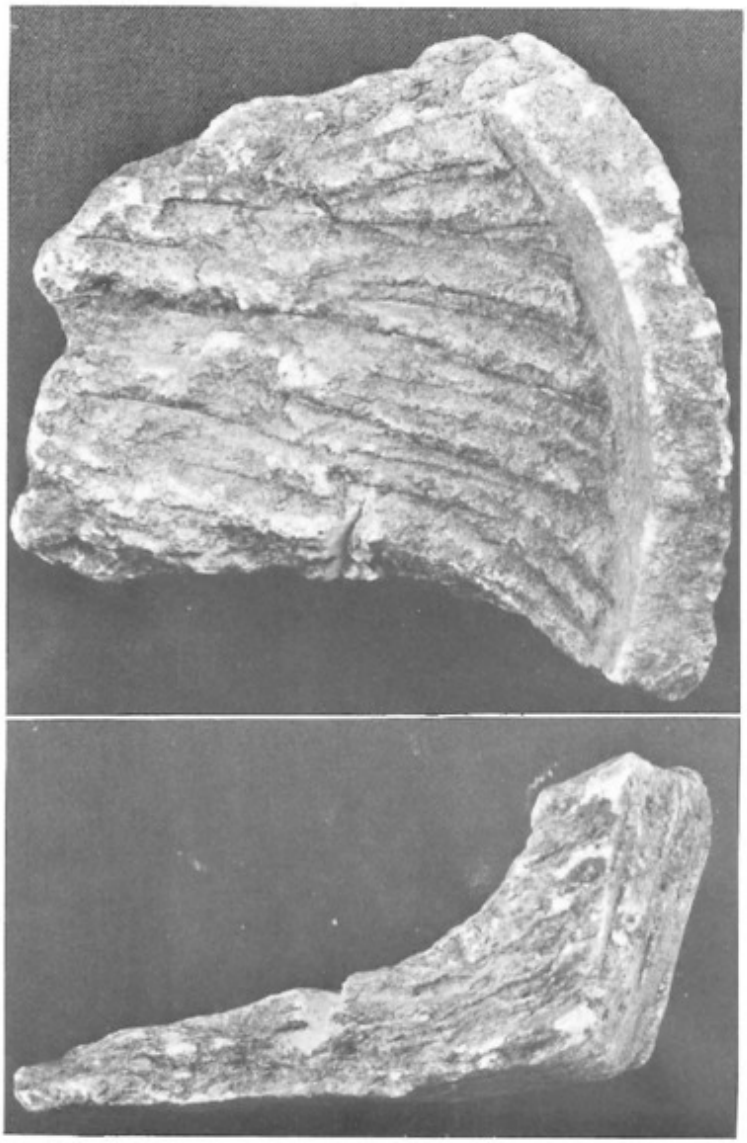


図版49　内部加工の状況

7．発見された資料

今回の調査で発見された資料は石鍋粗製品の欠損したものがほとんどで、わずかにそれ以外の資料も認められる。

写真50はいわゆる石鍋とは異なったものである。即ち、全形は浅鉢状を呈し、その器面に残されているノミ痕の具合も石鍋片に一般に眺められるものとは趣を異にしている。過去に当製作跡群から経筒と思われる資料も発見されていることも併せて、恐らく経筒の蓋として製作された失敗品であろう。



図版50　経筒（蓋）？

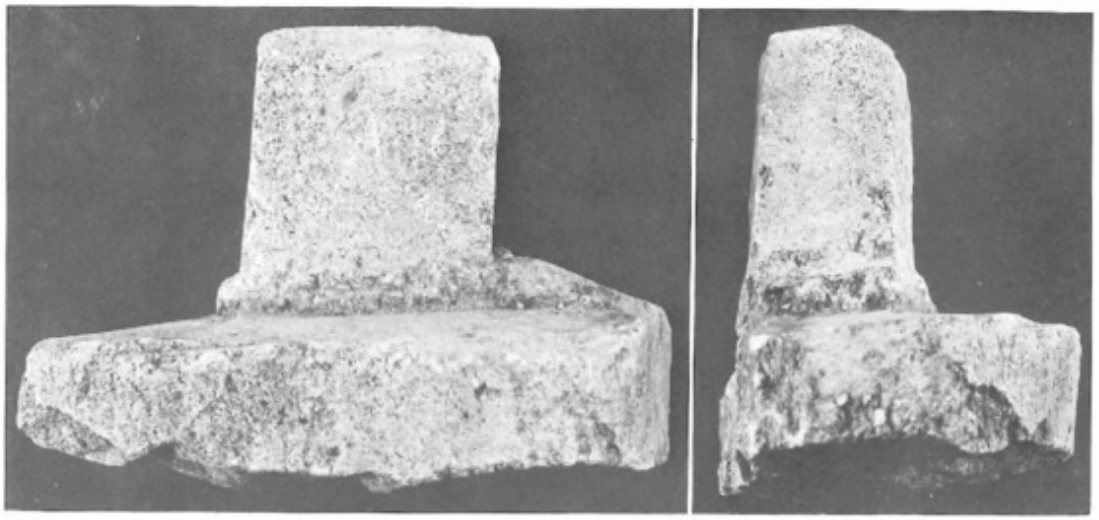
写真51は事前調査の段階で発見されたスタンプ状の石製品である。一見石鍋に見られる対をなす耳かとも思われるが、当製作跡群の石鍋資料には耳状の突起を付したもの（図版52）はなくていずれも器を巡る鍔を持っている。（図版53、54）しかも仮に耳とした場合もその突起部があまりにも長いということである。長崎県脇岬遺跡では歴史時代の遺物と共に滑石製のスタンプ状石製品があり[注]、つまみ部を持っていることなどは基本的に共通している。

これらの資料に形態的に類似するものとしては、焼物製作において胎土をたたきしめるときに使用する道具と似ていることを指摘し

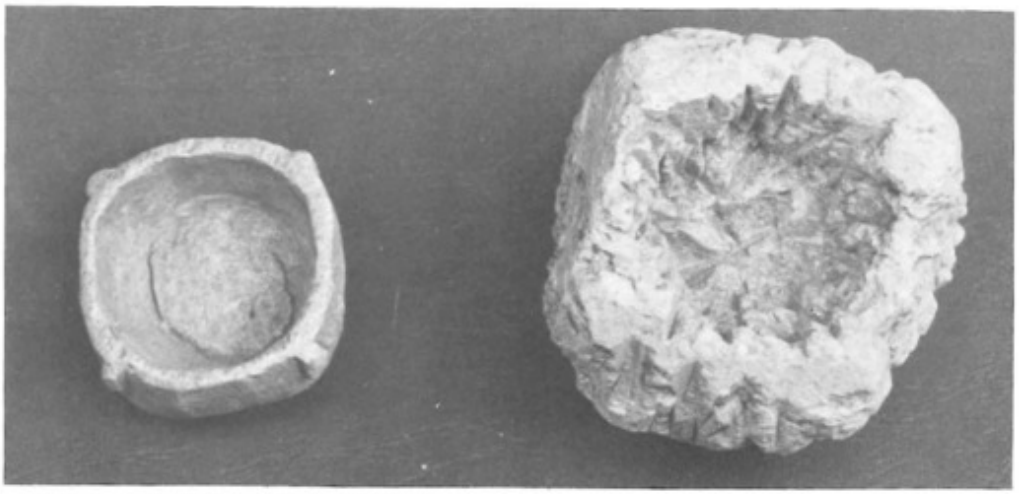
ておこう。

他に短冊状（図版55）あるいは筒型、(図版57) すりこぎ状の資料等があるが、(図版56) これらのものが何の目的をもって製作されたのかは判然としない。但し短冊状のものは石鍋片をこのような形につくりかえて一か所に穴をあけ、漁撈用の錘にしたと思われる資料がある。また滑石を利用した資料には石塔あるいは宝珠、請花をこれで作ったものが認められるところからして、鍋以外のもの、製作も行われていたと見るべきであろう。しかしその製作は非常に少なかったということはこの厖大な石鍋製作の痕跡と、その他の資料の発見が稀であることが如実に示していると言えよう。（下川）

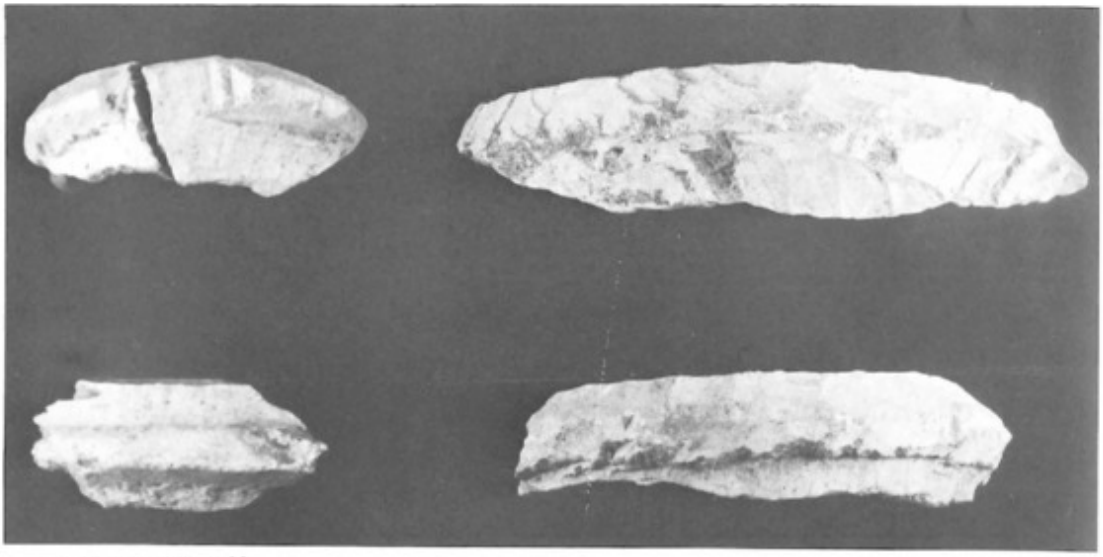
注：長崎大学医学部発掘調査による。



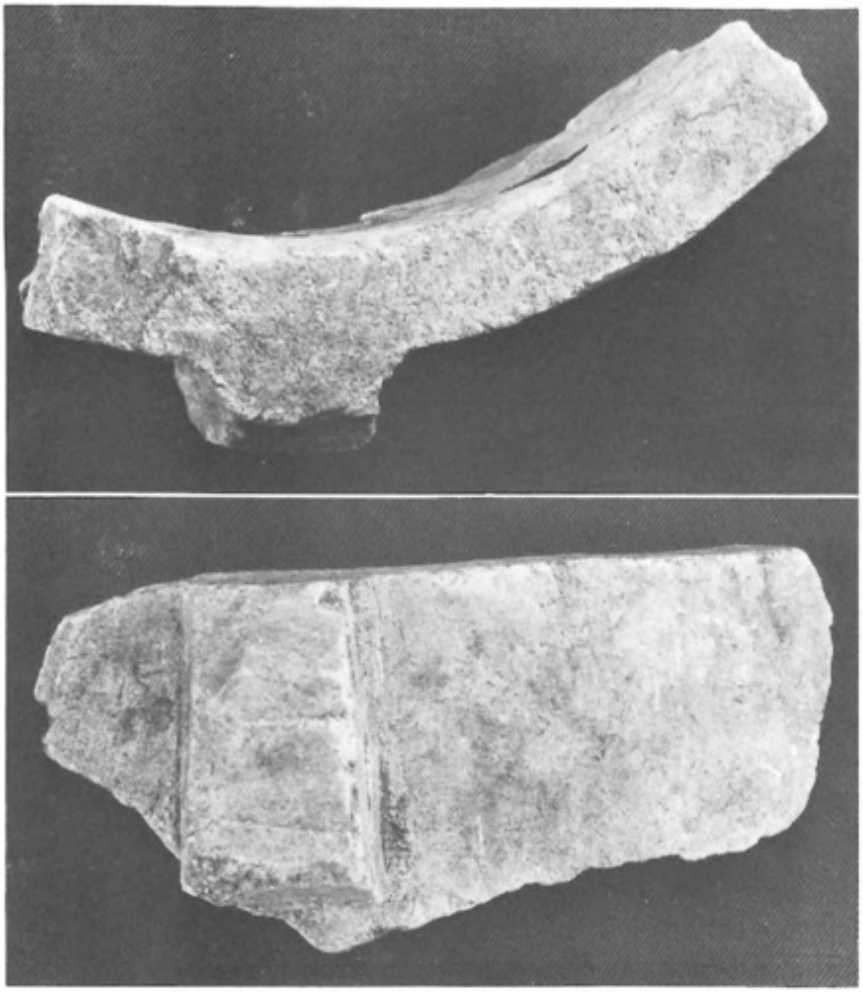
図版51　スタンプ型製品



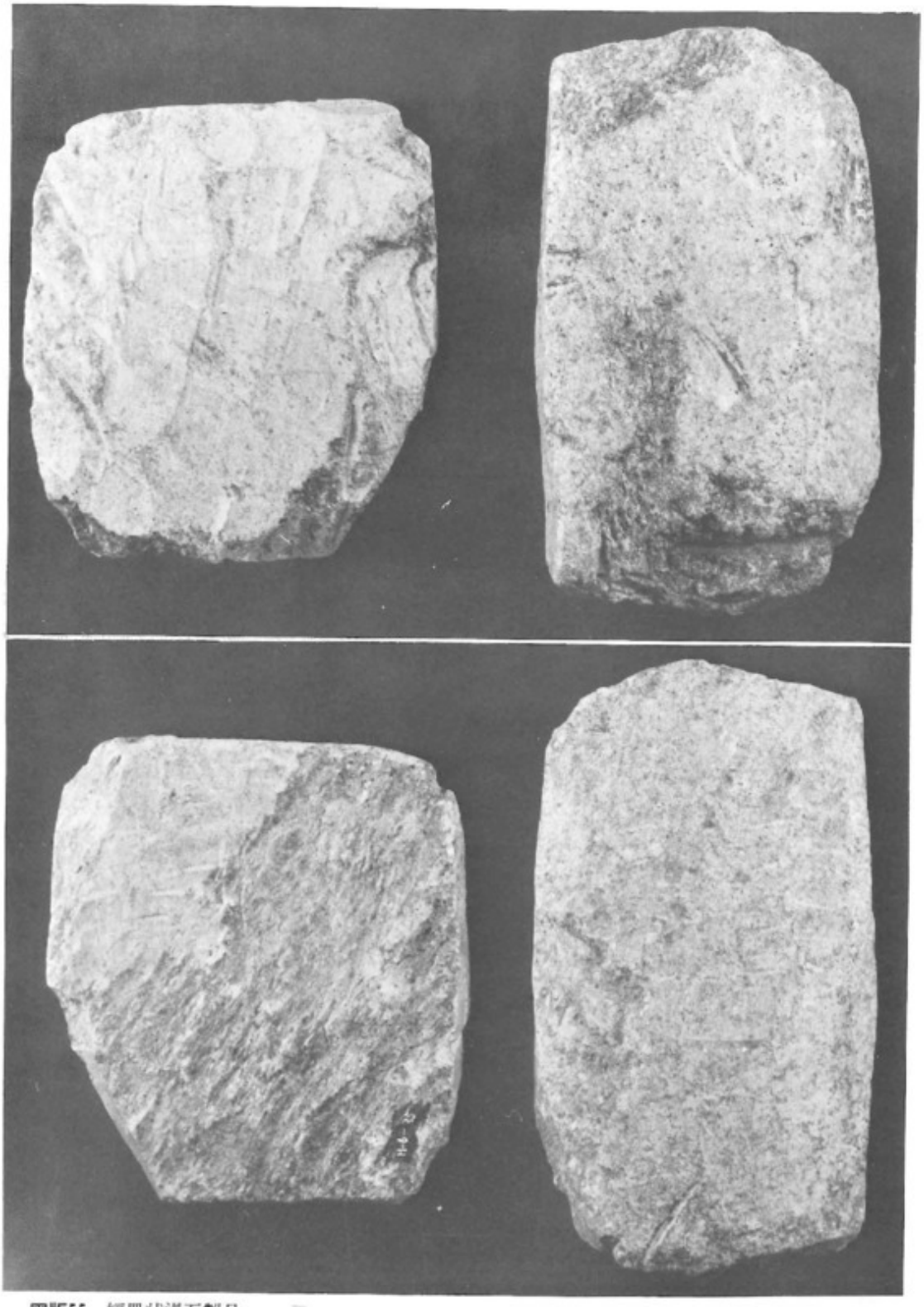
図版52　小型の石鍋製容器成品と粗型



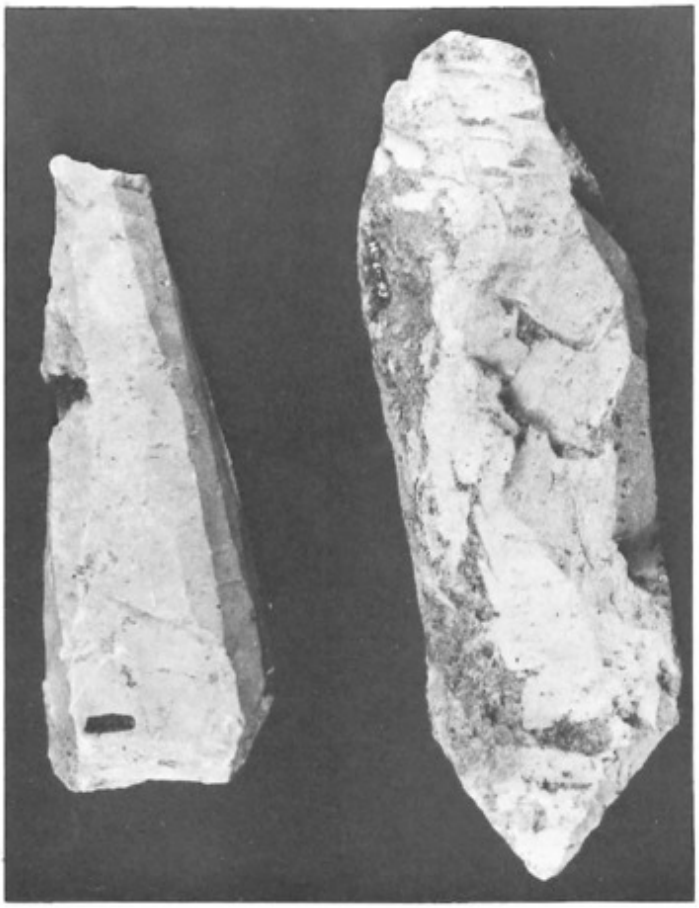
図版53石鍋の鍔各種



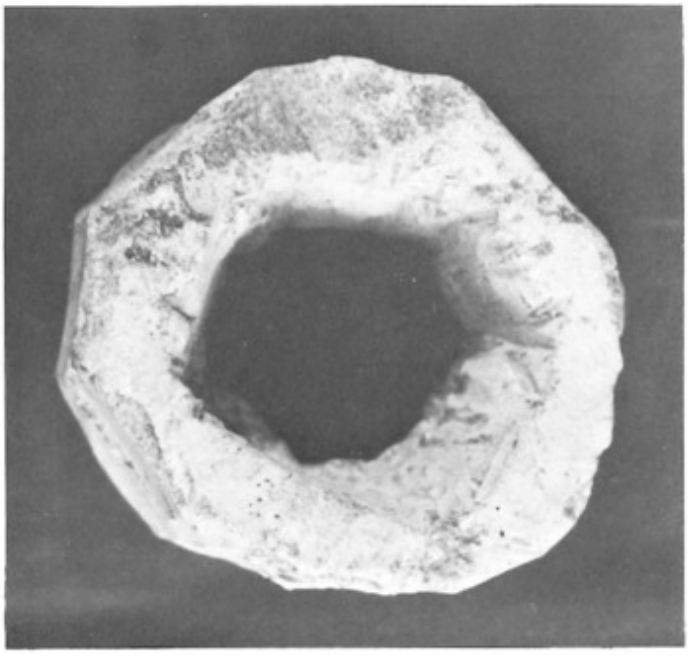
図版54　石鍋の鍔各種



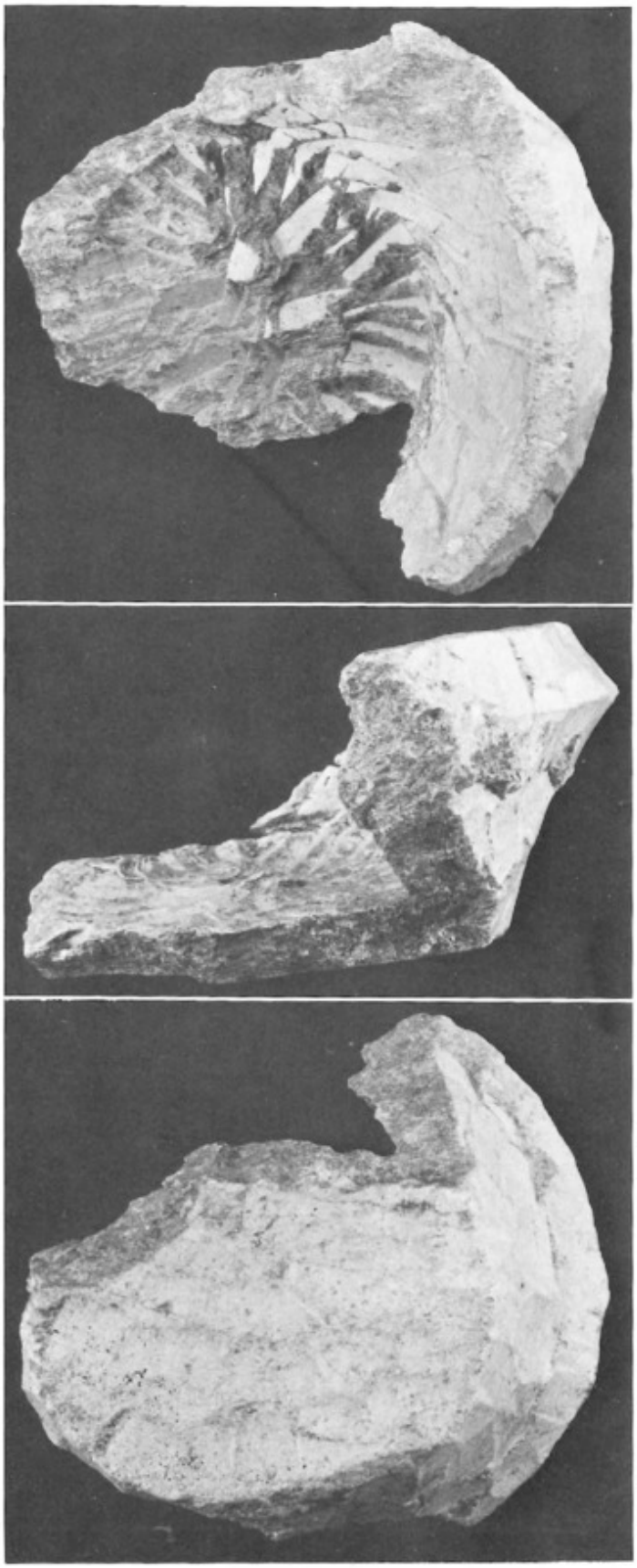
図版55　短冊状滑石製品



図版56　異型滑石製品



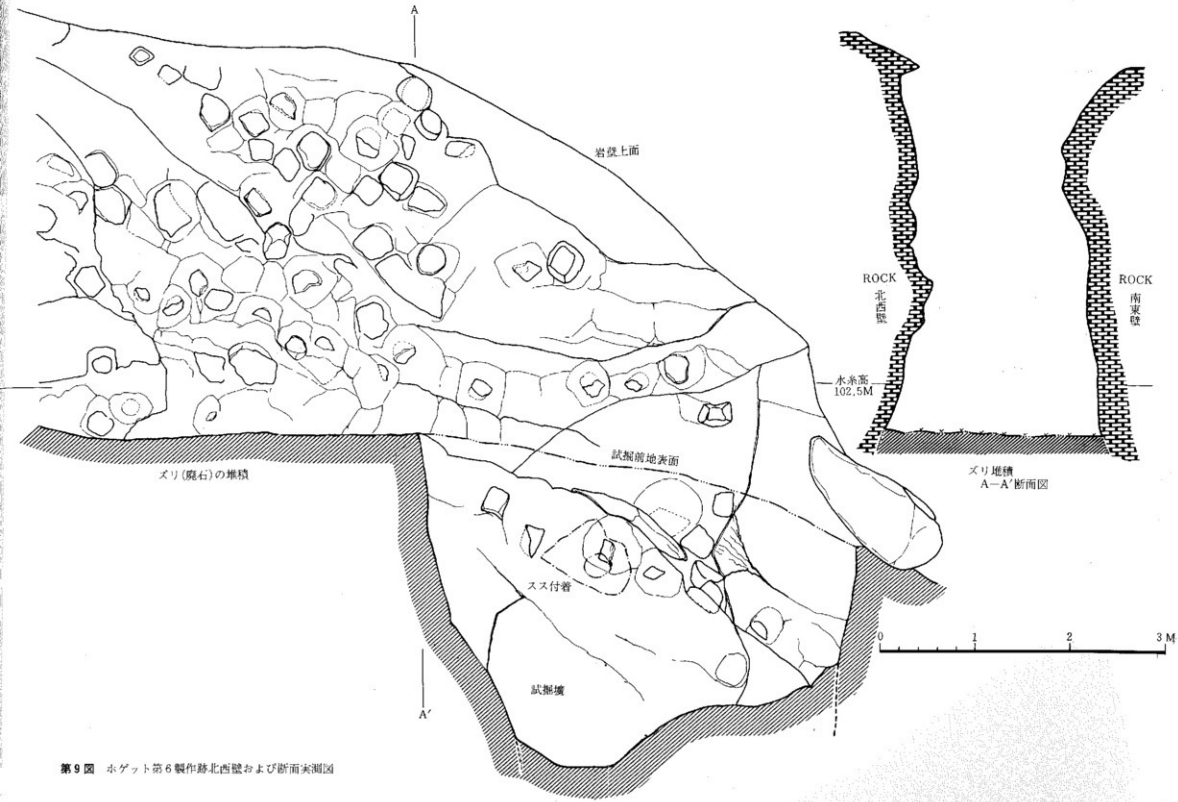
図版57　筒型滑石製品



図版58　時計まわりの内部加工のある破損品

図版59　鈴なりの石鍋製作（第６製作跡北西岩壁上半部）

図版60　調査風景ホゲット第11製作跡



第9図 ホゲット第6製作跡北西壁および断面実測図

滑石の利用

平安時代の終りから中世の遺跡の調査で、「石鍋」とよばれる滑石製容器がしばしば出土していることは広く知られている。形状は多く30㎝前後の直径を有する深鉢形のもので、ツバないし、ツマミが2対削り出されている。底部の作り出しを殊更にもたない、安定のよい形状である。韓国産のものと異り、我国のそれは蓋の出土例に接しておらず、現時点では、木製の蓋が伴っていたものであろうか。いずれにしても、西日本の各地から、沖縄県にいたるまで、特定種類の遺跡からでなく出土しているので、きわめて日常的な厨房具であると考えられる。

石鍋（あるいは石釜）の素材は滑石（タルク）であるが、特性のある石材である。第1には、きわめて軟質で、人間の爪をもってしても容易に傷がつけられるほどであり、ために、簡単な工具でも加工が可能である。劈解性に乏しく、大きなブロック状の器物にも加工され易い。石鍋や経筒のごとく容器状の石器を作り出すのに、容器の内側を抉りこむ加工が最も困難であるが、滑石の場合、他の石材に比して容易である、という特性がある。第2に、滑石を加熱した場合、熱の残留時間が長く、高熱によっても割れにくいという特性がある。古来、滑石の　とを「温石」[1]とよび、この呼び方は現在でも各地に残っている。大瀬戸町を含めて、滑石を砕いて粉末にし、加熱して布にくるみ、湯タンポ同様の用い方をする例は、つい最近まで行われていたという。第1点の特性とあいまって、厨房具（煮沸具）として利用するのに適していたことが首肯される。第3点は、砕いて粉末にした場合、粉末はきわめて微粒となり、かつ滑らかな点である。現今でも、シッカロールの基剤やタルカムパウダーの基剤として用いられている点を想起すれば足りよう。九州の縄文時代前期土器、曽畑式土器や、同中期の阿高式土器の表面は独特の手触りがあるが、滑石粉末の滑らかさそのものであり、シッカロールの滑らかな手触りと同じものである。また、和紙の手触りと、洋紙のそれを比較すれば、洋紙の手触りの滑らかさがタルクのそれであることに気づくであろう。

滑石はこのような特性をもち、現在でも広く利用されているが、その利用は古く、縄文時代にさかのぼることは周知のことである。現時点では、九州の縄文時代前期の代表的な土器として主に九州西半に姿を見せている曽畑式土器の胎土に滑石粉末が混入されている例が、その利用例としては最も古いが、土器の胎土中への混入は阿高式系統の土器に認められるものの、その後、粉末として滑石利用例は、遺物としては登場しない。もっとも、滑石なる名称よりすれば、前述のごとき民俗例もあり、保温材として用いられた可能性があるが、今のところ憶測の域を出ない。

一方、粉末としてでなく、ブロックとして整形加工された例は、史上に遺物として多く

のものが出現している。長崎県の県北、北松浦郡田平町にある里田原遺跡から、弥生時代中期初頭の土器（城ノ越式）に伴って、滑石製の石錘[2]が出土しており、滑石のブロックを加工した例としては最も古い例であろう。弥生時代に確実に伴った例[3]としては福岡県下で後期に伴った例もあるが、稀少例に属する。

古墳時代以降になると滑石製品の例は、種類も豊富になる。子持勾玉、土器枠型に用いるバレン状の石製品、擬柱形石製品等の各種形代、紡錘、宝珠、宝塔、仏像等の素材として用い方が多様化している。しかしながら、これらの滑石製品は大量に生産される日常具ではないため、このために大規模な生産体制を伴ったとは考えがたい。

滑石製品の大量生産とその流布を促した製品ものといえば「石鍋」をおいては考えにくい。石鍋の生産が行われた時期については、製作所遺跡に対する現時点での調査段階においては判断できる状態にないが、石鍋が出土している遺跡の時期が、大要平安末～中世とされているところよりして、石鍋製作所遺跡の時期もほぼ同時期と考えて大過ないであろう。一方、石鍋生産に関して、文献の面においても史料に乏しい。石鍋製作所遺跡の多い西彼杵郡は、旧藩時代においては大村藩に属しているところが多いが、全国的にみても特産といえる石鍋について全く藩関係の記録に留められていない点を考えた場合、旧藩時代には、石鍋生産が行われていなかった可能性を示している。（正林）

〔注〕

1．和名考異に医療に用いたことが記載されている。

2．里田原遺跡展　図録　長崎県教育委員会1975。

3．西谷　正氏の教示による。

石鍋出土地名の集録

今回の調査報告書作成に当って、石鍋ないし、石鍋製作に関する資料を集録するため、府県・政令指定都市文化財所管課・各研究機関・博物館・大学および研究者個人にアンケート調査をお願いした。アンケート調査をお願いした範囲は、一応従前の石鍋出土地を参考にして、近畿以西から沖縄県の範囲に限った。アンケートの内容は

1．滑石露頭の有無

2．石鍋「製作」の有無

3．石鍋出土遺跡の遺跡名・粗型精製の別・時代・所在地・文献

4．その他

とした。本項の地名等一覧は、およせいただいた回報に従前の知見を加えて作成したものである。紙上をかりて謝意を表したい。

石鍋製作所遺跡一覧（大瀬戸町を除く）

遺跡名	所在地	文献	発刊年
白野石鍋製作所跡	長崎県西彼杵郡西海町中浦南郷白野		
鍋石　〃	〃　〃　〃　〃　鍋石		
ナベシ谷　〃	〃　〃　西海町喰場郷温石原ナベシ谷	下川達彌　滑石製石鍋考	1973
なべ岩　〃	〃　〃　三和町為石	長崎県立美術博物館研究紀要 2	
三和中学校　〃	〃　〃　〃　〃		

石鍋出土地名一覧

出土地	報告者	報告名	文献	発行年
長崎県南松浦郡若松町白魚				
北松浦郡佐々町宮ケ原	佐々町郷土誌編纂委員会		佐々町郷土誌	1956
〃　宇久町平郷				
〃　田平町里城址				
〃　〃　里田原	長崎県教育委員会		里田原遺跡展図録	1975
〃　吉井町福井洞穴				
〃　〃　梶木場樋田神社			吉井町郷土誌	1966
〃　〃　直谷洞穴				
〃　〃　熊頭				
上県郡久根田舎村				
壱岐郡郷ノ浦町柳山手長男神社	下川達彌	滑石製石鍋考	長崎県立美術博物館研究紀要 2	1974
平戸市大島町				
〃　度島町				
〃　鏡川町	津田繁二	我長崎県の先史時代及び原始時代の遺蹟遺物の概略に就て	長崎談叢26	1940
〃　志々伎町志々伎浦	小楠浅太郎	肥前国北松浦郡志々伎村志々伎神社縁起並古代民族遺跡		1928

出土地	報告者	報告名	文献	発行年
長崎県平戸市野子町	小楠浅太郎	肥前国北松浦郡志々伎村志々伎神社縁起並古代民族遺跡		1928
〃 大久保町字山頭	萩原博文他	金柑茶屋第2遺跡		1978
佐世保市上小川内町牟田張				
〃 相浦町川迎	久村貞男	川迎貝塚試掘調査報告	佐世保市文化科学館文化財報告Ⅳ	1976
〃 竹辺町				
〃 〃 殿平				
〃 福石町字羅漢	下川達彌他	龍神洞穴調査報告	佐世保市文化科学館文化財報告Ⅲ	1975
〃 楠ノ木町字里見	久村貞男	里見池採集資料紹介	〃 Ⅳ	1976
〃 江上町三日月島				
〃 〃 支所裏				
〃 針尾中町本舟				
〃 〃 塩釜				
〃 萩坂町宇都宮				
〃 〃 字城	久村貞男	てぼ神古墳調査報告	佐世保市文化科学館文化財報告2	1971
〃 南風崎町字天神				
東彼杵郡川棚町五反田				
〃 東彼杵町里郷				
〃 〃 千綿宿郷赤木	津田繁二	我長崎県の先史時代及び原始時代の遺蹟遺物の概略に就て	長崎談叢26	1940
西彼杵郡西海町横瀬郷ケイマンゴウ	長崎県教育委員会	長崎県遺跡地名表	長崎県文化財調査報告書1	1962
〃 〃 七釜郷大平	津田繁二	我長崎県の先史時代及び原始時代の遺蹟遺物の概略に就て	長崎談叢26	1940
〃 〃 中浦郷鍋石	長崎県教育委員会	長崎県遺跡地名表	長崎県文化財調査報告書1	1962
〃 〃 〃 白野	〃	〃	〃	〃
〃 大瀬戸町奉還	〃	〃	〃	〃
〃 〃 雪の浦河通郷古田	〃	〃	〃	〃
〃 〃 〃 寺山				
〃 〃 〃 板ノ尾				
〃 〃 〃 メヒトツボ	八重津輝勝	肥前国雪ノ浦遺跡調査報告書	考古学雑誌14—14	1923

出土地	報告者	報告名	文献	発行年
長崎県西彼杵郡大瀬戸町雪の浦上郷小田	八重津輝勝	肥前国雪ノ浦遺跡調査報告	考古学雑誌14—14	1923
〃　〃　雪ノ浦幸物郷飯盛山	下川達彌	滑石製石鍋考	長崎県立美術博物館研究紀要2	1974
〃　〃　羽出川郷ホゲット	〃	〃	〃	〃
〃　〃　雪の浦小松郷重盛塚	長崎県史談会		長崎県郷土史	1933
〃　〃　雪の浦久良木郷古田	津田繁二	我長崎県の先史時代及び原始時代の遺蹟遺物の概略に就て	長崎談叢26	1940
〃　〃　〃　温石平	〃	〃	〃	〃
〃　西彼町白崎郷膝行神	〃	〃	〃	〃
〃　〃　〃　白崎	〃	〃	〃〃	〃
〃　〃　喰場郷温石原	〃	〃	〃	〃
〃　〃　大串郷	田渕栄蔵	先史時代の長崎県	長崎談叢9	1931
〃　〃　形上郷	長崎県教育委員会	長崎県遺跡地名表	長崎県文化財調査報告書1	1962
〃　〃　平山郷				
〃　琴海町村松郷平床	田渕栄蔵	先史時代の長崎県	長崎談叢9	1931
〃　〃　〃　次平次岩	〃	〃	〃	〃
〃　〃　〃　横道				
〃　〃　〃　桂山	津田繁二	我長崎県の先史時代及び原始時代の遺蹟遺物の概略について	長崎談叢26	1940
〃　三和町川原サシキノモト	〃		〃	〃
〃　〃　為石なべ岩				
〃　〃　中学校裏				
〃　〃　徳道				
〃　野母崎町脇岬井上				
〃　多良見町伊木力田原			多良見町郷土誌	1971
大村市皆同郷皆同	津田繁二	我長崎県の先史時代及び原始時代の遺蹟遺物の概略について	長崎談叢26	1940
〃　竹松郷ヤツギ	〃		〃	〃
長崎市深堀町深堀	賀川光夫他	深堀遺跡	長崎大学人類学考古学研究報告1	1967
北高来郡飯盛町善同寺下				
〃　〃　開名				

出土地	報告者	報告名	文献	発行年
長崎県南高来郡有明町大三東	古田正隆	中田遺跡図録	百人委員会埋蔵文化財報告8	1977
〃 国見町神代東里字筏				
〃 西有馬町市吉丁	浜口叶他	石錘の副葬ある石棺	九州考古学14	1962
〃 西有家町尾崎	長崎県教育委員会	長崎県遺跡地名表	長崎県文化財調査報告書1	〃
島原市安徳丁安中中南				
松浦市御厨町池田下	樋口隆康他	平戸の先史文化	平戸学術調査報告	1951
佐賀県神崎郡東背振村小川内				
〃 神崎町尾崎利田				
〃 〃 下中牧				
〃〃 〃 野山				
〃 千代田町崎村三本黒木				
佐賀市金立町黒土原				
〃 〃 大字金立字大門				
小城郡三明町戊	佐賀県教育委員会	戊遺跡	佐賀県文化財調査報告書36	1976
〃 芦刈町小路				
佐賀郡大和町西山				
三養基郡中原町綾部				
〃 〃 大字養原字香山				
鳥栖市永吉町長ノ原	鳥栖市教育委員会	長ノ原遺跡調査概報	鳥栖市文化財調査報告書5	1979
鹿島市大字音成丁儀助平	木下之治	儀助平洞穴		1973
〃 大字山浦字大殿分			鹿島史第1巻	
〃 納高分行成				
〃 鹿島町若殿分片山				
〃 大字中村横沢橋				
東松浦郡北波多村大字山彦字座主			北波多村史	1962
福岡県宗像郡福間町字津丸五郎丸	福岡県教育委員会	津丸五郎丸遺跡	福岡バイパス関係埋蔵文化財調査報告	1973
嘉穂郡八木山				
大牟田市大字四箇年の神	福岡県教育委員会	大牟田市年の神遺跡	九州縦貫道関係調査報告書	1970

出　　土　　地	報　告　者	報　　告　　名	文　　献	発行年
福岡県福岡市東区和白				
〃　〃　大字蒲田	福岡市教育委員会		福岡市埋蔵文化財調査報告書33	1975
〃　〃　大字多々良	〃		〃　20	1972
〃　博多区比恵				
〃　〃　板付	福岡市教育委員会	板付	福岡市埋蔵文化財調査報告書35	1976
〃　西区大字野方字牟多田	〃		〃　27	1974
〃　〃　拾六町湯納	〃	湯納遺跡	今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告1	1970
〃　〃　今津				
〃　周船寺丸隈				
〃　周船寺				
〃　博多区諸岡岡ノ前	福岡市教育委員会	板付周辺遺跡調査報告書(2)	福岡市埋蔵文化財調査報告書31	1975
筑紫郡大宰府町筑紫工業裏山				
〃　〃　都府楼				
〃　〃　御笠川南条坊			福岡南バイパス関係埋蔵文化財調査報告3	1976
〃　〃　大字観世音寺	九州歴史資料館	大宰府史跡		1973
〃　那珂川町大字中原観音12号墳				
春日市大字上白水字門田				
久留米市御井町朝妻				
〃　〃　大祝邸				
〃　〃　宗崎				
〃　〃　高良山	鏡　山　　猛	北九州の古代遺跡		1956
山門郡瀬高町鉾山	〃	庄園村落の遺構	史淵81	1960
〃　〃　金栗	〃	〃	〃	〃
〃　〃　上庄				
〃　〃　藤尾				
〃　三橋町垂見				
〃　大和町びわぞの	鏡　山　　猛	庄園村落の遺構	史淵81	1960
〃　〃　平木				
〃　〃　鷹尾中島				
山門郡瀬高町大道端	福岡県教育委員会		九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財報告XXIX	1979

出土地	報告者	報告名	文献	発行年
福岡県鞍手郡鞍手町中屋敷	福岡県教育委員会		九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財報告 XXIX	1979
〃 若宮町遠園	〃		〃 XVI	1977
甘木市大字柿原字野田	柿原野田遺跡調査団	柿原野田遺跡		1976
三井郡小郡町大字三沢	福岡県教育委員会	福岡県三沢所在遺跡予備調査概要		1971
粕屋群古賀町鹿部山	九州大学考古学研究室			
熊本県阿蘇郡阿蘇町乙姫				
球磨郡免田町市房隠れ				
熊本市健軍町字下村			熊本市内埋蔵文化財発掘調査報告書	1979
〃 小山町神園山			熊本市東部地区文化財調査報告書	1971
鹿児島県日置郡金峰町高橋	河口貞徳	鹿児島県高橋貝塚	考古学集刊 3－2	1965
熊毛郡上屋久町小寺屋敷	江藤正澄	上代石鍋考	考古界 4－8	1916
〃 中種町大園				
大島郡喜界町志戸桶七城				
姶良郡吉田村東佐多浦				
〃 吉田町本城				
川内市御陵下町薩摩国分寺跡		薩摩国分寺跡		1975
出水郡高尾野町放光寺		放光寺遺跡		1975
大分県宇佐市大字法鏡寺	宇佐市教育委員会	法鏡寺跡発掘調査概報 I		
宮崎県加世田市川畑杉木寺			宮崎文化財報告書	1958
沖縄県恩納村字安富祖熱田原	沖縄県教育委員会	恩納村熱田貝塚発掘調査ニュース		
久米島具志川村字具志川				
佐敷村字佐敷				
浦添市伊祖				
山口県宇部市大字上宇部北迫		宇部の遺跡		

出土地	報告者	報告名	文献	発行年
山口県防府市大字下右田		下右田遺跡		
〃 大字国衙		周防国衙		
山口市大字朝田		王子の森墳墓群		
〃 大字吉田		吉田岡畠、吉田大浴、下長野遺跡		
下関市蓋井島字筏石	小野忠熙	筏石遺跡	山口県文化財概要4	1961
鳥取県岩美郡国府町庁字土居	鳥取県教育委員会		因幡国府遺跡発掘調査報告書Ⅶ	1979
広島県広島市高陽町大字深川字西山	広島県教育委員会		高陽新住宅市街地開発事業地内文化財発掘調査報告	1977
尾道市土堂1—3—27	尾道市文化財協会		尾道中世遺跡発掘調査概報	1977
〃 久保2—5—21	尾道市教育委員会		尾道—市街地発掘調査概報—	1978
三次市向江田町字無量地				
福山市草戸町草戸千軒				
岡山県岡山市川入	岡山県教育委員会	川入・上東	岡山県埋蔵文化財発掘調査報告16	1977
〃 米田				
倉敷市曽原				
兵庫県宝塚市庵西町山清				
西宮市社家町西宮神社				
尼崎市栗山字北の浦		尼崎市栗山、庄下川遺跡、柱木遺跡	尼崎市文化財調査報告9	1974
赤穂郡山崎町菅野		中国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財調査報告書	兵庫県文化財調査報告11	1976
大阪府羽曳野市栄山				
〃 誉田上堂				
藤井寺市野中				
〃 国府				
東大阪市若江北町				

出上地	報告者	報告名	文献	発行年
大阪府東大阪市河内町				
四条畷市岡山425				
枚方市北楠葉町351—1				
和気市和気				
高槻市宮田町3—40他				
〃 上枚				
泉南郡阪南町箱作				
奈良県橿原市新賀町下明寺				
桜井市辻纏向	桜井市教育委員会	纏向		
滋賀県大津市皇子が丘1丁目字南川643—1	大津市教育委員会	大津宮関連遺跡	大津市文化財調査報告書6	1976
〃 錦織2丁目				
〃 三井寺				
〃 真野町神田				
高島郡新旭町堀川	新旭町教育委員会	新旭町堀川遺跡		1976
	滋賀県教育委員会	圃場整備関係遺跡発掘調査報告書V		1978
京都府京都市常盤井殿町	鈴木重治他	常盤井殿町遺跡発掘調査概報	同志社大学校地学術調査委員会調査資料2	1978
〃 三条	白石太一郎他	平安京三条西殿跡発掘調査報告	平安博物館研究紀要3	1971
〃	大石良材他	少将井遺跡発掘調査報告	平安博物館	1972
乙訓郡岩滝町弓木				

石鍋関係文献

《引用文献》

藤井　忠（1866）石鍋、東京人類学雑誌9

江藤正澄（1916）上代石鍋考、考古界4—8

喜田貞吉（1919）茶碗、民俗と歴史4－5

喜田貞吉（1920）石鍋、民俗と歴史4－6

津田繁二（1940）我長崎県の先史時代及び原史時代の遺蹟及び遺跡物の概略に就て、長崎談叢26

八重津輝勝（1923）肥前国雪ノ浦遺跡調査報告、考古学雑誌14—14

内山芳郎（1923）西彼杵郡雪の浦村に於ける史蹟、長崎縣史蹟名勝天然記念物報告

柳田康雄・副島邦弘（1970）大牟田市年の神遺跡、九州縦貫道関係調査報告書

鏡山　猛（1960）庄園村落の遺構、史淵81

小田富士雄・鶴久嗣郎（1962）防長地方の中世土鼎、九州考古学15

吉福清和（1966）古代の雪浦、長崎県立西彼高等学校郷土研究年報1

鏡山　猛（1956）環溝住居址論攷、史淵67、68

下川達彌（1974）滑石製石鍋考、長崎県立美術博物館研究紀要2

編 集 後 記

(石製の鍋が、大岩壁になっている)、直接に、粗型石鍋製作所遺跡の現場をみた人はこのように感想をもらした。(石製の鍋が、大岩壁に無数になっている。というが、一体どのような状態なのか)、石鍋製作所遺跡の調査ニュースを聞いた人や、現地を実見してなくて取材に来た報道関係者の人はこのような疑問を提出した。「鍋」という、きわめて庶民的な厨房具を、滑石という素材は知らなくとも、石で作ること自体は理解できるが、滑石岩壁に、粗型を削りこんで作るという特殊な作り方、そして、削りこまれた台形の粗型石鍋が岩壁狭しとばかり、無数のコブ状に文字どおりになっている壮観は、実見しない限り、想像の域をこえるものがあろう。

別に考古学を勉強している人でなくとも、石鍋は長崎県人ならずとも、広く知られているものであった。石鍋の素材である滑石についていえば、縄文時代の大昔から、現在まで身近に使用されてきた石材であることも広く知られていることである。身近かにありすぎると、物事は気づかれないものかもしれない。いささか考古学をかじっている私たちにおいても、今回の調査を通じて、はじめて石鍋工人の血と汗で刻みこまれた大岩壁に接し、険阻な山中での作業が、いかに困難をきわめたものか、重い石鍋を山中から運び出す苦労についても、はるかに思いをはせる程度であった。歴史上、なんらの記録もとどめられず、ひたすら「石鍋」を作り、運搬する重労働にたえた先人たちは、実は、鎌倉時代の台所に直結する生活用品の提供を続けた人々なのであるが、別に社会的な意識を強く抱いていたわけではなかったであろう。いわば歴史の裏方であったわけである。

裏方といえば、今回の調査については、約一年間の準備が必要であったが、調査の立案から予算の計上、そして調査自体への直接従事、そして一切のしめくくりまで、一手に手がけてこられた大瀬戸町教育委員会の方々の労苦を思うとき、石鍋工人たちのもくもくとした姿と映像がダブリがちである。教育委員会の方々とは別に、現地調査において、農事繁忙の時期に加勢して下さった大瀬戸町内の方々のことも特筆せざるを得ない。けわしい山中での調査で大変な労苦であったことは申すまでもないが、誠にクッタクない笑いをもって作業に従事いただいた。手製の山菜料理を御馳走になりながらの調査であったが、その味とともに、忘れ得ぬ昭和の石鍋工人の姿として眼底にやきついている。

(正林)

大瀬戸町文化財調査報告第1集
大瀬戸町石鍋製作所遺跡

印刷　昭和55年3月20日
発行　昭和55年3月31日

発行所　大瀬戸町教育委員会
(長崎県西彼杵郡大瀬戸町松浦郷2222)
〒857－23　TEL 09592－2－1111代
印刷所　日本紙工印刷株式会社